統一的な基準による財務書類

令和２年度決算分

南陽市財政課

１　統一的な基準による財務書類 P1～P9
（一般・全体・連結 財務書類三表）
２　統一的な基準による財務書類説明資料 P1～P18
３　南陽市の財務書類（分析編）P1～P14

【様式第1号】

一般会計等貸借対照表

（令和　3年　3月31日現在）

（単位：円）

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	42,955,391,314	固定負債	16,005,126,043
有形固定資産	40,499,024,172	地方債	13,803,805,043
事業用資産	22,912,796,028	長期未払金	0
土地	9,539,319,757	退職手当引当金	2,201,321,000
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	30,945,370,260	その他	0
建物減価償却累計額	-17,703,499,425	流動負債	1,606,722,040
工作物	435,008,982	1年内償還予定地方債	1,287,045,900
工作物減価償却累計額	-303,403,546	未払金	0
船舶	0	未払費用	0
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	300,340,090
航空機	0	預り金	19,336,050
航空機減価償却累計額	0	その他	0
その他	0	負債合計	17,611,848,083
その他減価償却累計額	0	【純資産の部】	
建設仮勘定	0	固定資産等形成分	43,720,663,622
インフラ資産	17,395,850,317	余剰分（不足分）	-16,827,712,498
土地	3,546,799,255		
建物	65,520,000		
建物減価償却累計額	-33,189,028		
工作物	29,947,638,105		
工作物減価償却累計額	-16,130,918,015		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	0		
物品	1,207,776,332		
物品減価償却累計額	-1,017,398,505		
無形固定資産	24,624,000		
ソフトウェア	24,624,000		
その他	0		
投資その他の資産	2,431,743,142		
投資及び出資金	401,592,062		
有価証券	28,902,762		
出資金	372,689,300		
その他	0		
投資損失引当金	-160,999,999		
長期延滞債権	74,677,095		
長期貸付金	19,403,248		
基金	2,105,465,074		
減債基金	101,580,493		
その他	2,003,884,581		
その他	0		
徴収不能引当金	-8,394,338		
流動資産	1,549,407,892		
現金預金	840,196,748		
未収金	37,157,157		
短期貸付金	0		
基金	672,066,066		
財政調整基金	662,769,066		
減債基金	9,297,000		
棚卸資産	0		
その他	0		
徴収不能引当金	-12,079	純資産合計	26,892,951,124
資産合計	44,504,799,207	負債及び純資産合計	44,504,799,207

【様式第2号及び第3号(結合)】

一般会計等行政コスト及び純資産変動計算書

自　令和　2年　4月　1日
至　令和　3年　3月31日

(単位:円)

科目	金額	金額	
		固定資産等形成分	余剰分(不足分)
経常費用	17,709,515,473		
業務費用	8,346,114,108		
人件費	2,751,302,200		
職員給与費	1,786,261,457		
賞与等引当金繰入額	300,340,090		
退職手当引当金繰入額	299,726,975		
その他	364,973,678		
物件費等	5,389,980,524		
物件費	3,168,222,369		
維持補修費	678,021,383		
減価償却費	1,542,799,512		
その他	937,260		
その他の業務費用	204,831,384		
支払利息	101,349,982		
徴収不能引当金繰入額	7,345,354		
その他	96,136,048		
移転費用	9,363,401,365		
補助金等	5,373,936,974		
社会保障給付	2,337,072,374		
他会計への繰出金	1,637,706,655		
その他	14,685,362		
経常収益	304,058,668		
使用料及び手数料	93,767,193		
その他	210,291,475		
純経常行政コスト	17,405,456,805		
臨時損失	11		
災害復旧事業費	0		
資産除売却損	11		
投資損失引当金繰入額	0		
損失補償等引当金繰入額	0		
その他	0		
臨時利益	4,229,565		
資産売却益	4,229,565		
その他	0		
純行政コスト	17,401,227,251		17,401,227,251
財源	16,724,770,818		16,724,770,818
税収等	9,646,865,005		9,646,865,005
国県等補助金	7,077,905,813		7,077,905,813
本年度差額	−676,456,433		−676,456,433
固定資産等の変動(内部変動)		−735,411,265	735,411,265
有形固定資産等の増加		552,091,602	−552,091,602
有形固定資産等の減少		−1,542,799,524	1,542,799,524
貸付金・基金等の増加		1,212,537,672	−1,212,537,672
貸付金・基金等の減少		−957,241,015	957,241,015
資産評価差額	4,983,927	4,983,927	
無償所管換等	−3,993,600	−3,993,600	
その他	−62,627,000	−728,000	−61,899,000
本年度純資産変動額	−738,093,106	−735,148,938	−2,944,168
前年度末純資産残高	27,631,044,230	44,455,812,560	−16,824,768,330
本年度末純資産残高	26,892,951,124	43,720,663,622	−16,827,712,498

【様式第4号】

一般会計等資金収支計算書

自　令和　2年　4月　1日
至　令和　3年　3月31日

（単位：円）

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	16,044,419,636
業務費用支出	6,681,018,271
人件費支出	2,636,351,229
物件費等支出	3,847,181,012
支払利息支出	101,349,982
その他の支出	96,136,048
移転費用支出	9,363,401,365
補助金等支出	5,373,936,974
社会保障給付支出	2,337,072,374
他会計への繰出支出	1,637,706,655
その他の支出	14,685,362
業務収入	16,705,841,023
税収等収入	9,392,900,057
国県等補助金収入	7,008,484,813
使用料及び手数料収入	93,878,293
その他の収入	210,577,860
臨時支出	0
災害復旧事業費支出	0
その他の支出	0
臨時収入	0
業務活動収支	661,421,387
【投資活動収支】	
投資活動支出	1,764,629,274
公共施設等整備費支出	552,091,602
基金積立金支出	1,170,657,672
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	41,880,000
その他の支出	0
投資活動収入	1,265,762,183
国県等補助金収入	69,421,000
基金取崩収入	912,915,255
貸付金元金回収収入	44,325,760
資産売却収入	4,229,566
その他の収入	234,870,602
投資活動収支	-498,867,091
【財務活動収支】	
財務活動支出	1,265,805,380
地方債償還支出	1,265,805,380
その他の支出	0
財務活動収入	955,100,000
地方債発行収入	955,100,000
その他の収入	0
財務活動収支	-310,705,380
本年度資金収支額	-148,151,084
前年度末資金残高	969,011,782
本年度末資金残高	820,860,698

前年度末歳計外現金残高	94,044,485
本年度歳計外現金増減額	-74,708,435
本年度末歳計外現金残高	19,336,050
本年度末現金預金残高	840,196,748

【様式第1号】

全体貸借対照表

（令和　3年　3月31日現在）

（単位：円）

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	65,122,350,021	固定負債	31,184,874,744
有形固定資産	60,866,960,008	地方債	21,903,497,528
事業用資産	22,912,796,029	長期未払金	0
土地	9,539,319,757	退職手当引当金	2,495,986,016
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	30,946,640,410	その他	6,785,391,200
建物減価償却累計額	−17,704,769,574	流動負債	2,562,208,511
工作物	435,008,982	1年内償還予定地方債	2,089,690,044
工作物減価償却累計額	−303,403,546	未払金	115,046,973
船舶	0	未払費用	0
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	327,238,321
航空機	0	預り金	30,233,173
航空機減価償却累計額	0	その他	0
その他	0	負債合計	33,747,083,255
その他減価償却累計額	0	【純資産の部】	
建設仮勘定	0	固定資産等形成分	65,803,532,415
インフラ資産	37,605,717,284	余剰分（不足分）	−31,425,040,601
土地	3,790,634,248		
建物	629,094,757		
建物減価償却累計額	−335,440,502		
工作物	60,231,478,131		
工作物減価償却累計額	−26,863,697,039		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	153,647,689		
物品	1,887,768,966		
物品減価償却累計額	−1,539,322,271		
無形固定資産	1,018,480,854		
ソフトウェア	1,017,974,307		
その他	506,547		
投資その他の資産	3,236,909,159		
投資及び出資金	404,931,062		
有価証券	28,902,762		
出資金	376,028,300		
その他	0		
投資損失引当金	−160,999,999		
長期延滞債権	170,788,510		
長期貸付金	19,403,248		
基金	2,823,095,393		
減債基金	101,580,493		
その他	2,721,514,900		
その他	84,780		
徴収不能引当金	−20,393,835		
流動資産	3,003,225,047		
現金預金	2,170,569,870		
未収金	174,219,800		
短期貸付金	0		
基金	672,066,066		
財政調整基金	662,769,066		
減債基金	9,297,000		
棚卸資産	17,361,377		
その他	3,220,800		
徴収不能引当金	−34,212,866	純資産合計	34,378,491,814
資産合計	68,125,575,068	負債及び純資産合計	68,125,575,068

【様式第2号及び第3号（結合）】

全体行政コスト及び純資産変動計算書

自　令和　2年　4月　1日
至　令和　3年　3月31日

（単位：円）

科目	金額	金額	
		固定資産等形成分	余剰分（不足分）
経常費用	24,567,947,693		
業務費用	10,198,722,721		
人件費	2,987,037,899		
職員給与費	1,989,286,350		
賞与等引当金繰入額	327,238,321		
退職手当引当金繰入額	279,492,373		
その他	391,020,855		
物件費等	6,717,093,034		
物件費	3,703,910,610		
維持補修費	719,110,503		
減価償却費	2,293,071,241		
その他	1,000,680		
その他の業務費用	494,591,789		
支払利息	243,475,800		
徴収不能引当金繰入額	22,291,098		
その他	228,824,891		
移転費用	14,369,224,972		
補助金等	5,562,605,834		
社会保障給付	8,791,918,776		
他会計への繰出金	0		
その他	14,700,362		
経常収益	1,544,444,676		
使用料及び手数料	1,160,659,430		
その他	383,785,246		
純経常行政コスト	23,023,503,017		
臨時損失	4,621,117		
災害復旧事業費	0		
資産除売却損	3,584,871		
投資損失引当金繰入額	0		
損失補償等引当金繰入額	0		
その他	1,036,246		
臨時利益	4,353,171		
資産売却益	4,229,565		
その他	123,606		
純行政コスト	23,023,770,963		23,023,770,963
財源	22,838,815,372		22,838,815,372
税収等	12,138,673,786		12,138,673,786
国県等補助金	10,700,141,586		10,700,141,586
本年度差額	−184,955,591		−184,955,591
固定資産等の変動（内部変動）		−860,591,207	860,591,207
有形固定資産等の増加		1,137,795,296	−1,137,795,296
有形固定資産等の減少		−2,332,393,838	2,332,393,838
貸付金・基金等の増加		1,321,596,350	−1,321,596,350
貸付金・基金等の減少		−987,589,015	987,589,015
資産評価差額	4,983,927	4,983,927	
無償所管換等	2,308,413	2,308,413	
その他	−62,627,000	−728,000	−61,899,000
本年度純資産変動額	−240,290,251	−854,026,867	613,736,616
前年度末純資産残高	34,618,782,065	66,657,559,282	−32,038,777,217
本年度末純資産残高	34,378,491,814	65,803,532,415	−31,425,040,601

【様式第4号】

全体資金収支計算書

自　令和　2年　4月　1日
至　令和　3年　3月31日

（単位：円）

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	22,130,139,209
業務費用支出	7,760,914,237
人件費支出	2,893,171,346
物件費等支出	4,395,343,550
支払利息支出	243,475,800
その他の支出	228,923,541
移転費用支出	14,369,224,972
補助金等支出	5,562,605,834
社会保障給付支出	8,791,918,776
他会計への繰出支出	0
その他の支出	14,700,362
業務収入	23,869,021,593
税収等収入	11,861,852,273
国県等補助金収入	10,457,586,420
使用料及び手数料収入	1,165,511,269
その他の収入	384,071,631
臨時支出	1,036,246
災害復旧事業費支出	0
その他の支出	1,036,246
臨時収入	123,606
業務活動収支	1,737,969,744
【投資活動収支】	
投資活動支出	2,397,211,231
公共施設等整備費支出	1,075,614,881
基金積立金支出	1,279,716,350
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	41,880,000
その他の支出	0
投資活動収入	1,388,968,078
国県等補助金収入	162,278,895
基金取崩収入	943,263,255
貸付金元金回収収入	44,325,760
資産売却収入	4,229,566
その他の収入	234,870,602
投資活動収支	−1,008,243,153
【財務活動収支】	
財務活動支出	2,232,329,974
地方債償還支出	2,232,329,974
その他の支出	0
財務活動収入	1,454,900,000
地方債発行収入	1,454,900,000
その他の収入	0
財務活動収支	−777,429,974
本年度資金収支額	−47,703,383
前年度末資金残高	2,198,937,203
本年度末資金残高	2,151,233,820

前年度末歳計外現金残高	94,044,485
本年度歳計外現金増減額	−74,708,435
本年度末歳計外現金残高	19,336,050
本年度末現金預金残高	2,170,569,870

【様式第1号】

連結貸借対照表

（令和　3年　3月31日現在）

（単位：円）

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	68,459,264,931	固定負債	33,414,368,849
有形固定資産	63,843,387,606	地方債等	23,628,644,312
事業用資産	25,504,533,619	長期未払金	0
土地	9,951,176,834	退職手当引当金	2,883,046,493
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	33,366,456,885	その他	6,902,678,044
建物減価償却累計額	−18,605,490,458	流動負債	2,951,645,260
工作物	722,294,872	1年内償還予定地方債等	2,308,255,851
工作物減価償却累計額	−478,983,941	未払金	216,423,005
船舶	0	未払費用	9,115,445
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	386,198,620
航空機	0	預り金	30,403,554
航空機減価償却累計額	0	その他	1,248,785
その他	1	負債合計	36,366,014,109
その他減価償却累計額	0	【純資産の部】	
建設仮勘定	549,079,426	固定資産等形成分	69,130,213,421
インフラ資産	37,607,957,748	余剰分（不足分）	−33,698,309,111
土地	3,790,634,248	他団体出資等分	0
建物	629,094,757		
建物減価償却累計額	−335,440,502		
工作物	60,241,012,019		
工作物減価償却累計額	−26,870,990,463		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	153,647,689		
物品	4,590,283,494		
物品減価償却累計額	−3,859,387,255		
無形固定資産	1,020,741,978		
ソフトウェア	1,019,779,130		
その他	962,848		
投資その他の資産	3,595,135,346		
投資及び出資金	399,942,861		
有価証券	28,902,762		
出資金	371,028,299		
その他	11,800		
長期延滞債権	170,792,155		
長期貸付金	24,801,547		
基金	3,180,900,318		
減債基金	101,580,493		
その他	3,079,319,825		
その他	92,470		
徴収不能引当金	−20,394,006		
流動資産	3,338,653,486		
現金預金	2,312,250,457		
未収金	352,787,623		
短期貸付金	0		
基金	672,066,066		
財政調整基金	662,769,066		
減債基金	9,297,000		
棚卸資産	22,573,940		
その他	13,190,240		
徴収不能引当金	−34,214,840		
繰延資産	1	純資産合計	35,431,904,310
資産合計	71,797,918,417	負債及び純資産合計	71,797,918,418

【様式第2号及び第3号】

連結行政コスト及び純資産変動計算書

自　令和　2年　4月　1日
至　令和　3年　3月31日

（単位：円）

科目	金額	金額		
		固定資産等形成分	余剰分（不足分）	他団体出資等分
経常費用	25,532,132,305			
業務費用	12,013,813,319			
人件費	3,935,180,685			
職員給与費	2,823,494,302			
賞与等引当金繰入額	386,198,620			
退職手当引当金繰入額	315,425,385			
その他	410,062,378			
物件費等	7,534,503,047			
物件費	4,261,196,356			
維持補修費	803,831,522			
減価償却費	2,459,615,911			
その他	9,859,258			
その他の業務費用	544,129,588			
支払利息	258,588,593			
徴収不能引当金繰入額	22,291,269			
その他	263,249,726			
移転費用	13,518,318,986			
補助金等	4,708,991,565			
社会保障給付	8,791,925,333			
その他	17,402,088			
経常収益	2,553,002,925			
使用料及び手数料	2,009,988,816			
その他	543,014,109			
純経常行政コスト	22,979,129,380			
臨時損失	36,173,531			
災害復旧事業費	0			
資産除売却損	12,917,430			
損失補償等引当金繰入額	0			
その他	23,256,101			
臨時利益	45,286,839			
資産売却益	4,490,185			
その他	40,796,654			
純行政コスト	22,970,016,072		22,970,016,072	
財源	22,884,745,662		22,884,745,662	
税収等	12,181,742,089		12,181,742,089	
国県等補助金	10,703,003,573		10,703,003,573	
本年度差額	−85,270,410		−85,270,410	0
固定資産等の変動（内部変動）		−940,258,522	940,258,522	
有形固定資産等の増加		1,238,092,382	−1,238,092,382	
有形固定資産等の減少		−2,520,575,390	2,520,575,390	
貸付金・基金等の増加		1,337,546,914	−1,337,546,914	
貸付金・基金等の減少		−995,322,428	995,322,428	
資産評価差額	4,983,927	4,983,927		
無償所管換等	2,308,413	2,308,413		
他団体出資等分の増加	0			0
他団体出資等分の減少	0			0
比例連結割合変更に伴う差額	50,779,414	0	50,779,414	
その他	−62,627,000	83,654,906	−146,281,906	
本年度純資産変動額	−89,825,656	−849,311,276	759,485,620	0
前年度末純資産残高	35,521,729,966	69,979,524,697	−34,457,794,731	0
本年度末純資産残高	35,431,904,310	69,130,213,421	−33,698,309,111	0

【様式第4号】

連結資金収支計算書

自　令和　2年　4月　1日
至　令和　3年　3月31日

（単位：円）

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	22,922,250,056
業務費用支出	9,403,931,070
人件費支出	3,830,418,585
物件費等支出	5,041,639,236
支払利息支出	268,525,112
その他の支出	263,348,137
移転費用支出	13,518,318,986
補助金等支出	4,708,991,565
社会保障給付支出	8,791,925,333
その他の支出	17,402,088
業務収入	24,877,927,546
税収等収入	11,917,567,125
国県等補助金収入	10,457,677,175
使用料及び手数料収	1,965,801,168
その他の収入	536,882,078
臨時支出	23,256,101
災害復旧事業費支出	0
その他の支出	23,256,101
臨時収入	40,786,654
業務活動収支	1,973,208,043
【投資活動収支】	
投資活動支出	2,506,098,821
公共施設等整備費支	1,168,622,215
基金積立金支出	1,295,453,306
投資及び出資金支出	11,800
貸付金支出	42,011,499
その他の支出	1
投資活動収入	1,424,054,288
国県等補助金収入	184,405,207
基金取崩収入	950,947,963
貸付金元金回収収入	44,325,760
資産売却収入	9,504,756
その他の収入	234,870,602
投資活動収支	-1,082,044,533
【財務活動収支】	
財務活動支出	2,501,922,598
地方債等償還支出	2,500,634,629
その他の支出	1,287,969
財務活動収入	1,565,545,736
地方債等発行収入	1,565,545,736
その他の収入	0
財務活動収支	-936,376,862
本年度資金収支額	-45,213,352
前年度末資金残高	2,335,941,190
比例連結割合変更に伴う差額	2,032,120
本年度末資金残高	2,292,759,957

前年度末歳計外現金残高	95,366,633
本年度歳計外現金増減額	-75,876,133
本年度末歳計外現金残高	19,490,500
本年度末現金預金残高	2,312,250,457

令和2年度

南陽市

統一的な基準による財務書類

説明資料

令和4年3月

落合公認会計士事務所

目　　次

Ⅰ　令和２年度　南陽市財務書類の公表について

Ⅱ　地方公会計制度について
（1）固定資産台帳と財務書類の作成の必要性
（2）地方自治体における地方債の特徴
（3）企業会計手法の導入
（4）財務書類とは？
（5）統一的な基準の活用方法
（6）日々仕訳とは？
（7）財務書類の作成ツール

Ⅲ　令和２年度　財務書類　（要約）
（1）貸借対照表〔バランスシート〕
（2）行政コスト計算書及び純資産変動計算書
（3）資金収支計算書
（4）相関図

Ⅳ　比率

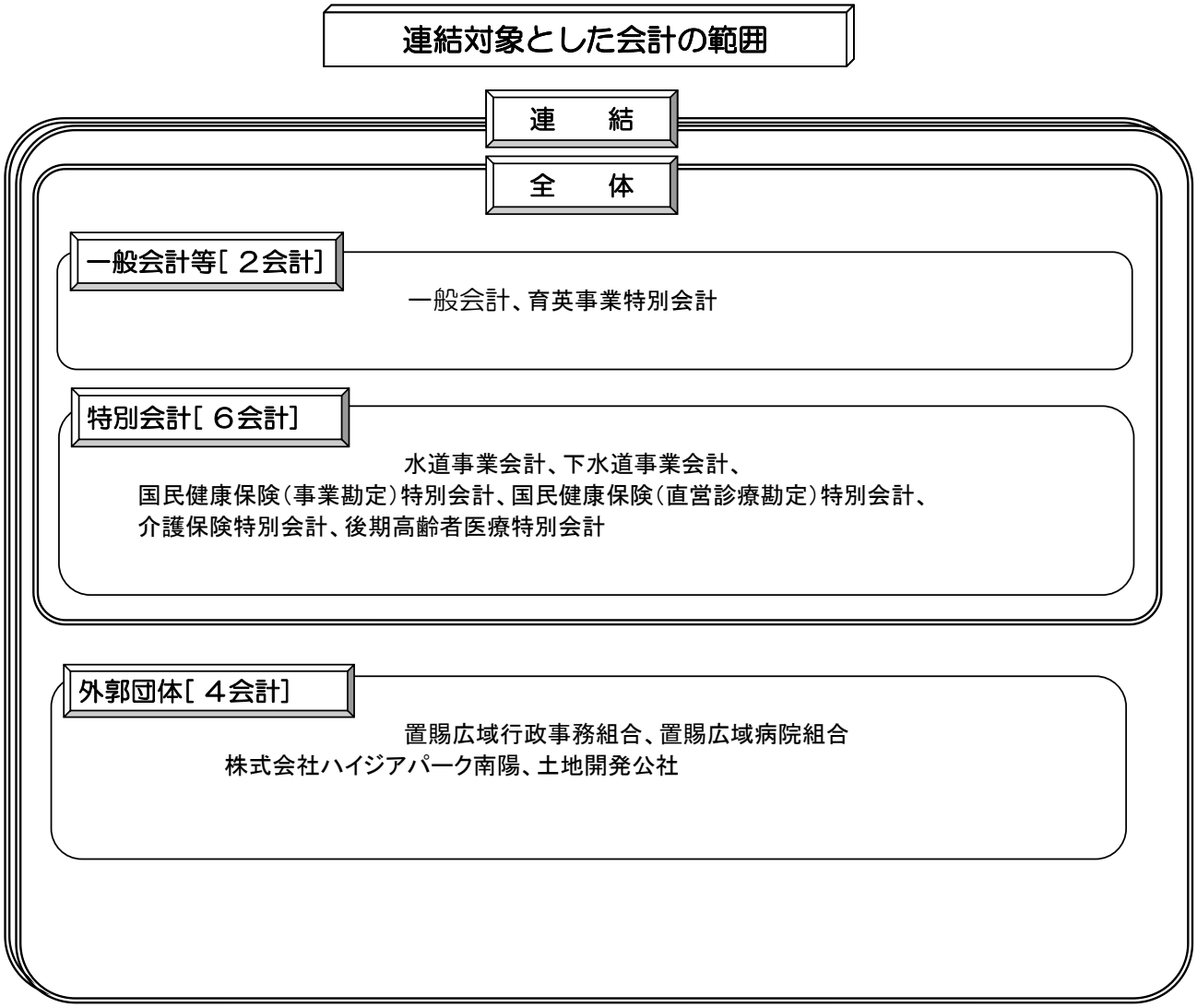
Ⅴ　財務書類分析からわかること
（1）比較分析のための前提条件
（2）貸借対照表から見える将来の負担
（3）実質債務（地方債等と現金預金）の状況
（4）純資産変動計算書の「本年度差額」の状況
（5）純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況
（6）資金収支計算書から読みとれる二つの基礎的財政収支の状況
（7）歳入歳出決算書の経年データ

Ⅰ　令和２年度　南陽市財務書類の公表について

平成１８年６月に成立した「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」を契機に、地方の資産・債務改革の一環として「新地方公会計制度の整備」が位置づけられました。これにより「新地方公会計制度研究会報告書」で示された「基準モデル」又は「総務省方式改訂モデル」を活用して、地方公共団体単体及び関連団体等を含む連結ベースでの財務書類を人口３万人以上の都市においては、平成２１年度までに整備し公表するよう通知されました。

こうした状況を踏まえ、本市では平成２０年度から「基準モデル」により資産台帳の整備に着手し、複式簿記に基づき発生主義による財務書類を作成することにより、本町が所有する全ての資産と負債状況や行政サービスに要したコストを把握してまいりました。

しかし、平成２６年４月３０日に財務書類の作成方法の統一化のための「今後の新地方公会計の推進に関する研究会報告書」が取りまとめられ、平成２７年１月２３日に「統一的な基準による地方公会計マニュアル」が取りまとめられました。本市では平成２７年度から「統一的な基準」により財務書類を作成することにしました。これにより団体間の比較可能性が確保され、将来的には決算分析や予算編成への活用を考えています。



※　全体とは、一般会計等に特別会計を含めたもので、**連結**とは、全体に外郭団体を含めたものです。
なお、外郭団体のうち第三セクターについては、市の出資比率が５０％以上の団体を対象としています。

Ⅱ 地方公会計制度について

1. 固定資産台帳と財務書類の作成の必要性

① 税収も地方債も同じ財源だが、返済義務の有無で相違するので、地方債に依存すると債務肥大化する。
② 債務が肥大化した理由の一つは、財源に借金を含めて、財政運営をしてきたためである。
③ 財政改善のための歳入増、歳出減は難しく、資産債務改革が必要となり、資産に手を付けることになった。
④ 地方交付税算定のための公有財産台帳並びに各種法定台帳の作成（数量管理）から、有効活用のための固定資産台帳（金額管理）の作成。
⑤ 厳しい財政事情のもと、財政の透明性、効率化、適正化が求められ、企業会計手法を活用した財務書類の開示も求められた。

2. 地方自治体における地方債の特徴

固定資産形成に充てるための地方債には、次の魅力がある。
① 財政運営上、借金は、現役世代と将来世代をつなぐ世代間公平性を確保するための、重要な架け橋である。
② 予算編成上、後日交付税措置される借金は、借金した方が得なので、税収・補助金収入と同様に、重要な財源である。

3. 企業会計手法の導入

（1）官庁会計に収支の概念を導入した
① 予算の適正・確実な執行においては、歳入と歳出は一致しなければならない。
② 財政状態を診断するためには、歳入から歳出を差し引いた収支の概念が必要となる。
（2）導入例
① 貸借対照表の純資産
② 資金収支計算書の基礎的財政収支（借金に依存しなかった場合の収支）
（あ）基礎的財政収支とは、計算上は、歳入から繰越金と公債発行を、歳出から公債費を、除外した収支。
（い）借金を財源とした結果、債務が肥大化したので、借金に依存しなかった場合の収支を把握する。

4. 財務書類とは？

（1）総務省の財務書類に対する考え方
① 財務書類の作成指針として、「民間の利益目的」でなく、「財政の三つの役割」を基礎にしている。
② 「財政の三つの役割」には、「資源配分機能」、「所得再分配機能」および「経済調整機能」。
③ 「資源配分機能」は、現役世代に対する資源配分と、将来世代に対する資源配分がある。
（2） 財務書類とは、自治体の「立ち位置」・「身の丈」を表す書類で、健康診断書でもあり、4表又は3表から構成される。

種類	数値の内容	情報内容
貸借対照表	発生主義データを含み、年度末時点の財政状態を示す	ストック情報
行政コスト計算書	減価償却費等の発生主義データを含み、現役世代に対する資源配分内訳を示す	1年間の運営状況を示す（フロー情報）
純資産変動計算書	現役世代に対する資源配分の合計額と将来世代に対する資源配分の増減額、並びに税収等財源を対比させ運営状況を示す	
資金収支計算書	現金主義により、資金収支による運営状況を示す	

（3）3表様式の長所
① 現役世代と将来世代に対する資源配分の状況の各内訳が、一つの表に集約されたので、議員、住民に対する説明が、しやすくなった。
② 行政コスト計算書と純資産変動計算書を結合させた書類が、民間企業の損益計算書に相当するので、理解しやすい。
（4）連結決算とは？
① 全体会計＝親＋子　　＝一般会計等決算＋公営事業会計
連結決算＝親＋子＋親戚＝一般会計等決算＋公営事業会計＋外郭団体（一組・広域＋関係団体）
② 連結決算の必要性
・ 親・子・親戚間で、「繰出金」、「負担金・補助金」、「委託費」を支出しており、資金関係が密接なため、相殺表示が必要である.。
（5）発生主義決算とは？
① ・歳入・歳出決算数値に、「見えないおカネ」を加えて決算すること。
・「見えないおカネ」とは、将来、資金の流出入が見込まれる事象に係る数値で、「発生主義数値」ともいう。
② 発生主義数値の例
・将来、資金の出し入れを伴い、債権債務の確定したもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・収入未済額、リース債務等
・現在、債権・債務は確定していないが、確定に準じたもの・・・・・・・・・・・・・・・・・賞与引当金、退職手当引当金等
・現時点の保有する資産の価値の増減を推定する項目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・減価償却費、不納欠損額、評価損益等

5. 統一的な基準の活用方法

（1）固定資産データの活用

毎年の「維持費」に「減価償却費」を加えてフルコストによる「事業別または施設別収支」を作成すること。

① 施設の更新、統廃合について、リストアップして議論する段階で、数値情報を提供する。

② フルコストによる受益者負担割合算定のための数値情報、及び一人あたりコスト情報を提供する。

③ 民間の資金・ノウハウを活用したPPP／PFIの導入のために、固定資産データの公表が期待される。

（2）財務書類の活用

年1回作成される財務書類は、自治体の「健康診断書」である。

① 誰が活用するのか・・・財政経営者つまり首長から財政までのラインで特に「財政課長」である。

② 活用とは？・・・・・・・・・・・経年比較、他団体比較を通じて、自分の役所の状況を読み取り、今後に活かすことである。
住民並びに住民の代表から質問があった場合、「財政課長が読み取ったことを、首長までが共有し、今後に活かしているので、活用されている。」

6. 日々仕訳とは？

（1）目的により簿記の方法が異なる。

① 予算の適正・確実な執行のためには、「複式簿記」より「単式簿記」が優れている。

② 財務書類を作成する場合、「見えないお金」も含むために、数値の正確性を担保するためには、「複式簿記」が必要。

（2）複式簿記の記帳のタイミング

① 「日々仕訳」が望ましいとされているが、そのためには全庁的に知識が必要。

② 金銭の入出金程度の記帳ならまだしも、日常業務に加えて複式簿記の習得など、民間ではあり得ない。

③ 事務負担や経費負担を考えて、「今後の新地方公会計の推進に関する研究会報告書（平成26年4月総務省）294項」に記載された「期末一括仕訳方式」により作成する。

7. 財務書類の作成ツール

① 「財務書類作成要領29段落」による集計値を使用する方法によれば、仕訳変換処理で特定できる場合の仕訳件数は、概ね節の科目数（歳入16・歳出28）程度の仕訳で済むので、表計算ソフトでの対応が可能となり、検証もしやすい。

② 当事務所の財務書類作成ソフトは、平成27年11月27日に特許権を取得した。

（参考）

（イ）統一的な基準で求められる固定資産台帳の基準モデル団体への取り扱い

① 固定資産マニュアルによれば、「既に固定資産台帳が基準モデル等に基づいて評価されている資産について、合理的かつ客観的な基準によって評価されたものであれば、引き続き、当該評価額によることを許容する」と記載し、二重負担を回避している。

② 道路、河川及び水路の敷地については、統一的な基準では、一定の場合1円評価としており、基準モデル評価を継続する場合、基準が異なることによる評価誤差が大きくなるので注記が求められる。

（ロ）統一的な基準で求められる複式簿記の方法

（1）財務書類作成の概略

① すべての資金取引について「仕訳変換」を行い、かつ、すべての非資金取引について「仕訳処理」を行い、仕訳帳に記載する。

② 仕訳帳が完成したら、会計ソフト、表計算ソフト等により集計し、総勘定元帳並びに試算表に転記し、財務書類が完成。

（2）仕訳帳への記載の仕方

① 単式簿記により記帳された歳入歳出データは、「仕訳変換処理」により、仕訳帳に記載する。

(a)予算科目から、統一的な基準の勘定科目を「特定できる」場合

・工事請負費・公有財産購入費・委託費等の固定資産に関係する予算科目を除くと、その多くの予算科目は、行政コストに計上されるものと資産に計上されるものとに、特定されている。

・特定された予算科目は、統一的な基準の地方公会計マニュアル資金仕訳変換表「別表6-1:6-2 」に従い、仕訳変換処理する。

・仕訳変換処理の設定をしておけば仕訳集計が、<u>自動計算されるので、簿記の知識の有無は重要ではない。</u>

(b)予算科目から、統一的な基準の勘定科目を「特定できない」場合

・「特定できない」場合とは、工事請負費等の固定資産に関係する予算科目の場合であり、個別伝票毎に、その歳入歳出について、行政コストなのか資産形成なのか、科目及び金額を特定する必要がある。

・資産形成か維持補修費の特定は、<u>簿記の知識が必要となり、システムの自動計算で変換してくれない。</u>

② 仕訳記帳されていない非資金取引（見えないお金）は、複式簿記により、仕訳帳に記載する。

・発生主義取引による非資金仕訳例は、「財務書類作成要領」の「別表7」に例示されている。

・作成担当者は、発生主義データの意味、計算過程を知る必要があるので、<u>複式簿記の知識が必要</u>である。

（3）仕訳変換処理の単位

① 仕訳帳は、歳入歳出データを単位として、伝票単位毎に作成することを、原則とする。

② 歳入歳出データとの整合性が検証できる場合には、「予算科目単位で集計した歳入歳出データ」に仕訳を付与し、仕訳帳の1単位とすることも妨げない。」という、予算科目単位の集計値による変換法とする。（マニュアル「財務書類作成要領29段落」）

Ⅲ 令和２年度 財務書類 （要約）

（1）貸借対照表（バランスシート）（令和3年3月31日）

令和3年3月31日現在に保有する資産、負債、純資産を表示したもので、地方自治体が、住民サービスを提供するために保有している資産と、その資産をどのような財源（負債・純資産）で賄ってきたのかについて、総括的に示したものです。行政的には、資産は、サービス提供能力を示し、負債は、将来世代の負担を示し、純資産は、現在までの世代の負担と捉えます。

（単位：百万円）

資産の部							負債の部						
項目	一般会計等		全体		連結		項目	一般会計等		全体		連結	
	金額	比率	金額	比率	金額	比率		金額	比率	金額	比率	金額	比率
(1)固定資産	42,955	97%	65,122	96%	68,459	95%	(1)固定負債	16,005	36%	31,185	46%	33,414	47%
(1)有形固定資産	40,499	91%	60,867	89%	63,843	89%	①地方債等	13,804	31%	21,903	32%	23,629	33%
①事業用資産	22,913	51%	22,913	34%	25,505	36%	②退職手当引当金	2,201	5%	2,496	4%	2,883	4%
②インフラ資産	17,396	39%	37,606	55%	37,608	52%	③その他	0	0%	6,785	10%	6,903	10%
③物品	190	0%	348	1%	731	1%	(2)流動負債	1,607	4%	2,562	4%	2,952	4%
(2)無形固定資産	25	0%	1,018	1%	1,021	1%	①1年内償還予定地方債等	1,287	3%	2,090	3%	2,308	3%
(3)投資その他の資産	2,432	5%	3,237	5%	3,595	5%	②未払金	0	0%	115	0%	216	0%
①投資及び出資金	402	1%	405	1%	400	1%	③その他	320	1%	357	1%	427	1%
②長期延滞債権	75	0%	171	0%	171	0%							
③基金	2,105	5%	2,823	4%	3,181	4%	負債の部合計	17,612	40%	33,747	50%	36,366	51%
④徴収不能引当金	−8	0%	−20	0%	−20	0%	純資産の部						
⑤その他	−142	0%	−142	0%	−136	0%	固定資産等形成分	43,721	98%	65,804	97%	69,130	96%
(2)流動資産	1,549	3%	3,003	4%	3,339	5%	余剰分（不足分）	−16,828	−38%	−31,425	−46%	−33,698	−47%
①現金預金	840	2%	2,171	3%	2,312	3%							
②未収金	37	0%	174	0%	353	0%							
③財政調整基金等	672	2%	672	1%	672	1%							
④徴収不能引当金	−0	0%	−34	0%	−34	0%							
⑤その他	0	0%	21	0%	36	0%	純資産の部合計	26,893	60%	34,378	50%	35,432	49%
資産の部合計	44,505	100%	68,126	100%	71,798	100%	負債・純資産の部合計	44,505	100%	68,126	100%	71,798	100%

住民一人当たり

項目	一般会計等	全体	連結	項目	一般会計等	全体	連結
資産の部	146 万円	223 万円	235 万円	負債の部	58 万円	110 万円	119 万円
				純資産の部	88 万円	112 万円	116 万円

項目の説明

(1)-(1)有形固定資産	①事業用資産 ： 庁舎や学校などの有形固定資産
	②インフラ資産 ： 道路や河川などの社会基盤となる資産
	③物品 ： 器具備品や機械装置などの資産
(1)-(2)無形固定資産	ソフトウェア等無形の資産
(1)-(3)投資その他の資産	①投資及び出資金 ： 運用目的の有価証券や出資金等の資産
	②長期延滞債権 ： 税等の未収金や貸付金などの回収期限到来後1年を経過した資産
	③基金 ： 特定の目的のために積立した資産
	④徴収不能引当金 ： 長期延滞債権や長期の貸付金に対して徴収不能とみられる金額を見積り引当した金額
(2)流動資産	①現金預金 ： 形式収支額（歳入歳出の差し引き額）や歳計外現金などの現金や預金の資産
	②未収金 ： 税収や使用料手数料のうち回収期限到来後1年を経過していない資産
	③財政調整基金等 ： 財政調整基金や1年以内に地方債の償還に充てられる減債基金
(1)固定負債	①地方債等 ： 地方債・借入金残高のうち翌年度に償還する額を除いた残高
	②退職手当引当金 ： 将来の退職者に対する給付すべきこととなる退職金の引当額
(2)流動負債	①1年内償還予定地方債等 ： 地方債・借入金残高のうち翌年度償還予定額
	②未払金 ： 企業会計団体の財貨または用役の提供を受けたが、支払が済んでいない残高
◎ 純資産合計	これまでの世代が負担して蓄積された資産

概 要

今までに南陽市では、一般会計等ベースで445億円、全体ベースで681億円、連結ベースで718億円の資産を形成してきています。

そのうち、純資産である、269億円（一般会計等）、344億円（全体）、354億円（連結）については、これまでの世代の負担で支払いが済んでおり、負債である176億円（一般会計等）、337億円（全体）、364億円（連結）について、これからの世代が負担していくことになります。

※ 令和3年3月31日の南陽市の人口： 30,565 人

※四捨五入したため一致しない部分があります。

(2)行政コスト計算書及び純資産変動計算書(令和2年4月1日から令和3年3月31日)

行政コスト計算書は、1年間の行政運営コストのうち、福祉サービスなどの提供といった資産形成に結びつかない行政サービスに要したコストを人件費、物件費、その他の業務費用、移転費用に区分して表示したものです。

純資産変動計算書(NWM)は、純資産(過去の世代や国・都道府県が負担した将来返済しなくてよい財産)が年度中にどのように増減したかを、①財源、②資産評価差額、③無償所管替等、④その他に区分して表示したものです。

(単位:百万円)

項目	一般会計等		全体		連結	
	金額	比率	金額	比率	金額	比率
1 経常費用 計 (行政コスト総額)	17,710	102%	24,568	107%	25,532	111%
① 人件費	2,751	16%	2,987	13%	3,935	17%
② 物件費等	5,390	31%	6,717	29%	7,535	33%
うち減価償却費	1,543	9%	2,293	10%	2,460	11%
③ その他の業務費用	205	1%	495	2%	544	2%
④ 移転費用	9,363	54%	14,369	62%	13,518	59%
2 経常収益	304	2%	1,544	7%	2,553	11%
3 臨時損失	0	0%	5	0%	36	0%
4 臨時利益	4	0%	4	0%	45	0%
純行政コスト	17,401	100%	23,024	100%	22,970	100%
5 財源	16,725	96%	22,839	99%	22,885	100%
① 税収等	9,647	55%	12,139	53%	12,182	53%
② 国県等補助金	7,078	41%	10,700	46%	10,703	47%
本年度差額	-676	-4%	-185	-1%	-85	0%
6 資産評価差額	5	0%	5	0%	5	0%
7 無償所管替等	-4	0%	2	0%	2	0%
8 その他の純資産変動額	-63	0%	-63	0%	-12	0%
本年度純資産変動額	-738	-4%	-240	-1%	-90	0%
前年度末純資産残高	27,631	-	34,619	-	35,522	-
本年度末純資産残高	26,893	-	34,378	-	35,432	-

※固定資産等の変動(内部変動)・固定資産等形成分	-735	-	-861	-	-940	-
・有形固定資産等の増加	552	-	1,138	-	1,238	-
・有形固定資産等の減少	1,543	-	2,332	-	2,521	-
・貸付金・基金等の増加	1,213	-	1,322	-	1,338	-
・貸付金・基金等の減少	957	-	988	-	995	-

住民一人当たり

項目	一般会計等	全体	連結
1 純行政コスト	57 万円	75 万円	75 万円
2 財源	55 万円	75 万円	75 万円
3 本年度差額 (2財源－1純行政コスト)	-2 万円	-1 万円	-0 万円

項目の説明

1 経常費用	①人件費 : 職員給与や議員報酬、退職給付費用など
	②物件費等 : 備品や消耗品、委託費、使用料施設等の維持修繕に係る経費や事業用資産の減価償却費など
	③その他の業務費用 : 地方債、関係団体の借入金の償還利子や徴収不能引当金繰入額など
	④移転費用 : 住民への補助金や児童手当、生活保護費などの社会保障費など
2 経常収益	施設を使用した際に徴収する使用料や証明書の発行手数料、財産売払収入、雑入など
3 臨時損失	災害復旧事業費、資産の除売却損など臨時に発生するもの
4 臨時利益	資産の売却益など臨時に発生するもの
5 財源	①税収等 : 町税や利子割交付金などの交付金、特別会計の保険料等の収入など
	②国県等補助金 : 国や都道府県からの補助金収入
6 資産評価差額	有価証券等の評価差額など
7 無償所管替等	無償で譲渡または取得した固定資産の評価額等など
※固定資産の変動	有形固定資産・貸付金・基金等将来世代に対する資産形成の状況をいう

概 要

令和2年度の純行政コストは、一般会計等ベースで174億円、全体ベース230億円、連結ベースで230億円になります。

住民の皆さんが負担した市税や国県等補助金などの財源は、一般会計等ベースで167億円、全体ベースで228億円、連結ベースでは229億円になります。

純行政コストと財源に資産評価差額,無償所管替等を加減した本年度純資産変動額は、一般会計等ベースで△7億円、全体ベースで△2億円、連結ベースで△1億円であり、将来返済しなくてよい財産が一般会計等、全体、連結すべてで減少したことになります。

また、将来の世代に対する固定資産の変動状況ですが、一般会計等ベースで△7億円、全体ベースで△9億円、連結ベースで△9億円となり、一般会計等、全体、連結すべてで減少しました。

※四捨五入したため一致しない部分があります。

（３）資金収支計算書（令和2年4月1日から令和3年3月31日）

資金収支計算書は、１年間の資金の出入りを、現役世代に対する「業務活動収支」と、将来世代に対する「投資活動収支」と、将来世代が負担すべき「財務活動収支」という三つに区分した計算書です。

（単位：百万円）

項目	一般会計等	全体	連結
(イ)業務活動収支（④-③+②-①）	661	1,738	1,973
①業務支出（注）	16,044	22,130	22,922
②業務収入	16,706	23,869	24,878
③臨時支出	0	1	23
④臨時収入	0	0	41
(ロ)投資活動収支（②-①）	-499	-1,008	-1,082
①投資活動支出	1,765	2,397	2,506
②投資活動収入	1,266	1,389	1,424
利払後基礎的財政収支(イ＋ロ)	**163**	**730**	**891**
(ハ)財務活動収支（②-①）	-311	-777	-936
①財務活動支出	1,266	2,232	2,502
②財務活動収入	955	1,455	1,566
1　本年度資金収支額(イ＋ロ＋ハ)	-148	-48	-45
2　前年度末歳計現金残高	969	2,199	2,336
3　比例連結割合変更に伴う差額	0	0	2
4　本年度末歳計現金残高(1＋2)	821	2,151	2,293
5　本年度末歳計外現金残高	19	19	19
6　本年度末現金預金残高(4＋5)	840	2,171	2,312
（注）うち、地方債等支払利息支出	101	243	269

項目の説明

イ-①業務支出 ： 行政サービスを行う中で、毎年度継続的に支出されるもの
（人件費、物件費、補助費、扶助費など）

イ-②業務収入 ： 行政サービスを行う中で、毎年度継続的に収入されるもの
（町税、保険料、使用料、手数料など）

イ-③臨時支出 ： 行政サービスを行う中で、臨時的に支出されるもの（災害復旧事業費など）

イ-④臨時収入 ： 行政サービスを行う中で、臨時的に収入されるもの
（資産の売却に伴う収入など）

ロ-①投資活動支出 ： 公共施設や道路整備などの資産形成、投資や貸付金などの金融資産形成に支出したもの

ロ-②投資活動収入 ： 公共施設の資産形成の財源に充てられた補助金収入、土地などの固定資産の売却収入など

ハ-①財務活動支出 ： 地方債や借入金などの元本の償還

ハ-②財務活動収入 ： 地方債や借入金の収入

概　要

令和2年度は、一般会計ベースで△1億円、全体ベースで0億円、連結ベースで0億円の資金が変動し、期末資金残高は、一般会計等ベースで8億円、全体ベースで22億円、連結ベースで23億円になりました。

利払後基礎的財政収支は、公債費を賄う財源となるものですが、一般会計等ベースで2億円、全体ベースで7億円、連結ベースで9億円でした。

※四捨五入したため一致しない部分があります。

（4）財務書類の相関図

下記は、財務書類3表の関係を表しています。（一般会計等）

（単位：百万円）

【資金収支計算書＝CF】		
項目		金額
(イ)業務活動収支		661
	①業務支出	16,044
	②業務収入	16,706
	③臨時支出	0
	④臨時収入	0
(ロ)投資活動収支		−499
	①投資活動支出	1,765
	②投資活動収入	1,266
(ハ)財務活動収支		−311
	①財務活動支出	1,266
	②財務活動収入	955
1 本年度資金収支額(イ＋ロ＋ハ)		−148
2 前年度末歳計現金残高		969
3 本年度末歳計現金残高(1＋2)		821
4 本年度末歳計外現金残高		19
5 本年度末現金預金残高(3＋4)		840

（注）1年間の資金の出入りを表す資金収支計算書の「本年度末現金預金残高」は、下記の貸借対照表の資産の部に計上されます。

（単位：百万円）

【行政コスト計算書及び純資産変動計算書＝NW】				
項目		金額	4表形式では、純行政コストまでが「行政コスト計算書」、財源から下が「純資産変動計算書」となる	
経常費用		17,710		
	業務費用	8,346		
	移転費用	9,363		
経常収益		304		
臨時損失		0	固定資産等形成分	余剰分（不足分）
臨時利益		4		
純行政コスト		17,401		17,401
財源		16,725		16,725
本年度差額		−676		−676
固定資産等の変動(内部変動)			−735	735
	有形固定資産等の増加		552	−552
	有形固定資産等の減少		1,543	−1,543
	貸付金・基金等の増加		1,213	−1,213
	貸付金・基金等の減少		957	−957
資産評価差額		5	5	
無償所管換等		−4	−4	
その他		−63		
本年度純資産変動額		−738		
前年度末純資産残高		27,631		
本年度末純資産残高		26,893	43,721	−16,828

（注）1年間の行政コストと財源等の収支尻を表す「本年度末純資産残高」は、下記の貸借対照表の純資産の部に計上されます。

（単位：百万円）

【貸借対照表＝BS】				
資産の部			負債・純資産の部	
(1)固定資産		42,955	(1)固定負債	16,005
	有形固定資産	40,499	(2)流動負債	1,607
	無形固定資産	25	負債の部合計	17,612
	投資その他の資産	2,432	固定資産等形成分	43,721
(2)流動資産		1,549	余剰分（不足分）	−16,828
	現金預金	840		
	その他	709	純資産の部合計	26,893
資産の部合計		44,505	負債・純資産の部合計	44,505

（注）貸借対照表の純資産の部の「固定資産等形成分」の計算

① 開始時の「純資産の部合計」の計算

➡「資産の部合計」−「負債の部合計」・・・・差額である

② NWの本年度末残高と照合する、BS残高の算出方法

➡(固定資産合計−長期延滞債権+固定徴収不能引当金+投資損失引当金)+（短期貸付金+流動基金）

（注）「長期延滞債権」とは収入未済の滞納繰越分であり、その歳入金額は「余剰分」に含まれて「固定資産等形成分」に含まれないので、その算出から除外する。

③ 余剰分（不足分）の計算

➡「純資産の部合計」−「固定資産等形成分」・・・・・差額である

Ⅳ 分析比率

1．社会資本形成の世代間比率〔地方債等／（事業用資産＋インフラ資産＋物品）〕

・社会資本の整備の結果を示す事業用資産とインフラ資産と物品を地方債等などによってどれくらい調達したかを表します。
この指標が高いほど将来の世代が負担する割合が高いことを表します。

	令和２年度	令和元年度	比較増減
一般会計等	37.3%	37.0%	0.3%
全　体	39.4%	39.8%	-0.4%
連　結	40.6%	41.2%	-0.6%

2．純資産比率〔純資産／総資産〕

・企業会計でいう「自己資本比率」に相当し、この比率が高いほど財政状況が健全であるといえます。
総資産のうち返済義務のない純資産がどれくらいの割合かを表します。

	令和２年度	令和元年度	比較増減
一般会計等	60.4%	60.8%	-0.4%
全　体	50.5%	50.1%	0.4%
連　結	49.3%	48.9%	0.5%

3．有形固定資産減価償却率 〔減価償却累計額÷(有形固定資産－土地等＋減価償却累計額)〕

・有形固定資産が耐用年数に対して、資産の取得からどの程度経過しているのかを全体として把握することができます。

	令和２年度	令和元年度	比較増減
一般会計等	56.2%	54.3%	2.0%
全　体	49.7%	47.8%	1.8%
連　結	50.4%	49.2%	1.2%

4．受益者負担比率 〔経常収益÷経常費用〕

・行政コスト計算書の経常収益は、使用料・手数料など行政サービスに係る受益者負担の金額ですので、これを経常費用と比較することにより、行政サービスの提供に対する受益者負担の割合を算出することができます。

	令和２年度	令和元年度	比較増減
一般会計等	1.7%	2.5%	-0.8%
全　体	6.3%	7.6%	-1.3%
連　結	10.0%	12.0%	-2.0%

Ⅴ　財務書類からわかること

（1）比較分析のための前提条件

（注1）　統一的な基準で財務書類を作成している他の5団体（可能な限り同規模）と比較し、分析比率を算出する。

（注2）　他団体数値は、前年度公表データから引用しているが、空欄は未公表部分である。

（注3）　四捨五入をしたため一致しない部分があります。

・ 分析比率算定のための基礎データ

	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
住民数：人数	30,565	79,878	29,846	25,857	35,039	47,720
面積：K㎡	160.52	548.51	240.93	214.67	222.85	206.94
可住地面積：K㎡	64.92	133.29	78.58	79.08	96.34	75.12
職員数	285	988	324	293	274	373
財政力指数	0.49	0.58	0.50	0.45	0.52	0.68
経常収支比率	93.8	93.0	95.1	92.8	95.8	92.7
実質地方債費比率	11.9	7.9	6.7	11.7	8.0	6.6
将来負担比率	131.5	43.2	84.3	178.9	25.8	6.7
特記事項						

（2）貸借対照表から見える将来の負担

本年3月末時点の財政状態を、「どれだけ資産を持っているのか。」または、「将来負担がどれだけ残っているのか。」、どちらの視点で見るのか？　ここでは、後者の将来のリスクの観点から見ます。

住民サービスに供されている資産総額のうち、「将来の負担」が、どの程度あるのか？
➡本年度末の資産総額に占める負債総額の割合は、39.6%となっている。

（a）経年比較　　（単位：百万円）

区分	項目	27	28	29	30	31	R02
資産合計	一般会計等	48,567	48,007	47,187	46,502	45,451	44,505
	全体会計	72,900	72,363	71,468	70,709	69,104	68,126
	連結会計	76,388	75,694	74,627	73,983	72,709	71,798
負債合計	一般会計等	19,365	18,653	18,185	18,059	17,820	17,612
	全体会計	38,173	36,880	36,237	35,581	34,485	33,747
	連結会計	41,891	39,576	38,672	37,938	37,187	36,366
負債の割合	一般会計等	39.9%	38.9%	38.5%	38.8%	39.2%	39.6%
	全体会計	52.4%	51.0%	50.7%	50.3%	49.9%	49.5%
	連結会計	54.8%	52.3%	51.8%	51.3%	51.1%	50.7%

（b）他団体比較　　（単位：百万円）

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
資産合計	一般会計等	44,505	123,450	50,879	30,995	60,129	62,270
	全体会計	68,126	181,476	71,701	38,629	81,059	94,043
	連結会計	71,798	191,762	75,312	44,770	87,783	98,755
負債合計	一般会計等	17,612	40,786	20,210	19,688	17,867	22,152
	全体会計	33,747	79,739	30,780	24,505	29,722	34,287
	連結会計	36,366	85,564	32,987	28,445	31,237	36,384
負債の割合	一般会計等	39.6%	33.0%	39.7%	63.5%	29.7%	35.6%
	全体会計	49.5%	43.9%	42.9%	63.4%	36.7%	36.5%
	連結会計	50.7%	44.6%	43.8%	63.5%	35.6%	36.8%

（3） 実質債務（地方債等と現金預金）の状況

住民一人当たり実質債務で「将来の負担」をみる場合、他団体と比較してみると？

➡本年度末では、11,473百万円あるが、住民一人当たりの実質債務は、375,368円である。

（a）経年推移

★一般会計等の実質債務　（単位：百万円）

区分	項目	27	28	29	30	31	R02
借金	地方債等	15,101	14,788	14,385	14,301	14,074	13,804
	1年以内償還予定地方債等	1,412	1,252	1,256	1,250	1,266	1,287
	合計	16,513	16,040	15,641	15,552	15,340	15,091
貯金	固定基金	823	1,013	1,325	1,252	1,642	2,105
	現金預金	1,147	798	999	1,124	1,063	840
	財政調整基金等	729	1,574	1,226	1,114	878	672
	合計	2,699	3,385	3,550	3,491	3,583	3,618
差引		13,814	12,655	12,091	12,061	11,757	11,473

★全体決算の実質債務

借金	地方債等	25,643	24,812	23,912	23,358	22,656	21,903
	1年以内償還予定地方債等	2,269	2,102	2,082	2,061	2,052	2,090
	合計	27,912	26,914	25,994	25,418	24,709	23,993
貯金	固定基金	1,323	1,494	1,852	1,824	2,281	2,823
	現金預金	2,245	2,065	2,388	2,664	2,293	2,171
	財政調整基金等	729	1,574	1,226	1,114	878	672
	合計	4,297	5,134	5,466	5,602	5,452	5,666
差引		23,615	21,781	20,527	19,816	19,257	18,327

★連結決算の実質債務

借金	地方債等	28,127	26,400	25,514	24,879	24,464	23,629
	1年以内償還予定地方債等	2,984	2,649	2,315	2,316	2,311	2,308
	合計	31,111	29,049	27,829	27,196	26,775	25,937
貯金	固定基金	1,453	1,827	2,220	2,216	2,626	3,181
	現金預金	2,327	2,360	2,515	2,802	2,431	2,312
	財政調整基金等	729	1,574	1,226	1,114	878	672
	合計	4,509	5,761	5,961	6,132	5,935	6,165
差引		26,602	23,287	21,868	21,064	20,840	19,772

(b)他団体比較

★一般会計等の実質債務　（単位：百万円）

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
借金	地方債等	13,804	32,196	15,983	16,064	13,813	17,085
	1年以内償還予定地方債等	1,287	3,051	1,234	1,129	1,359	1,886
	合計	15,091	35,247	17,217	17,193	15,172	18,971
貯金	固定基金	2,105	5,341	927	727	2,052	2,700
	現金預金	840	1,560	793	492	936	627
	財政調整基金等	672	1,857	1,462	368	2,139	2,524
	合計	3,618	8,758	3,182	1,587	5,127	5,851
	差引	11,473	26,489	14,035	15,606	10,045	13,120

★全体決算の実質債務

借金	地方債等	21,903	48,549	24,867	19,318	21,385	26,354
	1年以内償還予定地方債等	2,090	4,610	1,779	1,407	2,211	2,531
	合計	23,993	53,159	26,646	20,725	23,596	28,885
貯金	固定基金	2,823	7,134	2,311	892	3,008	3,242
	現金預金	2,171	6,809	1,658	1,552	2,551	4,307
	財政調整基金等	672	1,857	1,462	541	2,139	2,524
	合計	5,666	15,800	5,431	2,985	7,698	10,073
	差引	18,327	37,359	21,215	17,740	15,898	18,812

★連結決算の実質債務

借金	地方債等	23,629	52,151	26,915	21,917	21,752	27,322
	1年以内償還予定地方債等	2,308	5,459	1,832	1,809	2,288	2,821
	合計	25,937	57,610	28,747	23,726	24,040	30,143
貯金	固定基金	3,181	8,489	2,438	1,731	3,928	3,681
	現金預金	2,312	7,747	2,083	1,831	2,958	5,056
	財政調整基金等	672	1,859	1,463	542	2,161	2,524
	合計	6,165	18,095	5,984	4,104	9,047	11,261
	差引	19,772	39,515	22,763	19,622	14,993	18,882

(c)　住民一人当たり実質債務（財政の健全化の指標）

（単位：円）

区分	会計区分	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
住民一人当たり実質債務残高	一般会計等	375,368	331,618	470,247	603,550	286,681	274,937
	全体会計	599,622	467,701	710,816	686,081	453,723	394,216
	連結会計	646,873	494,692	762,682	758,866	427,895	395,683

（注）計算式＝実質債務（臨財債を含む）÷住民数

(d)臨時財政対策債の経年推移

決算統計33表58行近辺の2列目・4列目より　（単位：百万円）

区分	項目	27	28	29	30	31	R02
臨時財政対策債	発行額	492	414	426	420	342	327
	元金償還額	292	327	360	393	425	453
	現在高	5,559	5,646	5,712	5,739	5,656	5,530

（単位：百万円）

区分	項目	27	28	29	30	31	R02
臨財債控除後現在高	一般会計等	10,954	10,394	9,929	9,813	9,684	9,561
	全体会計	22,353	21,268	20,282	19,679	19,053	18,463
	連結会計	25,552	23,403	22,117	21,457	21,119	20,407

（4）純資産変動計算書の「本年度差額」の状況

貸借対照表のように過去から現在までの自治体の蓄積でなく、本年度の発生主義による数値を見ます。

①「本年度差額」は、民間企業の利益の計算式と同じですが、そういう観点に立った場合どうだったのか？

➡本年度の純行政コストと財源の差額である「本年度差額」は、一般会計等で−,676百万円である。

（a） 経年比較

NWMより　　（単位：百万円）

区分	項目	27	28	29	30	31	R02
一般会計等	① 人件費	2,280	2,293	2,230	2,174	2,262	2,751
	② 物件費等	4,000	4,341	4,561	4,675	4,933	5,390
	③ その他の業務費用	282	223	200	184	189	205
	④ 移転費用	5,617	5,967	6,426	5,762	6,395	9,363
	経常収益	371	332	357	382	342	304
	臨時損失	274	67	8	21	22	0
	臨時利益	26	300	66	2	3	4
	純行政コスト	12,056	12,259	13,002	12,432	13,455	17,401
	① 税収等	9,304	9,404	9,377	9,114	9,602	9,647
	② 国県等補助金	2,666	2,993	3,274	2,718	2,987	7,078
	財源	11,970	12,397	12,651	11,832	12,589	16,725
	本年度差額	−86	138	−351	−600	−866	−676
全体	① 人件費	2,527	2,555	2,673	2,418	2,486	2,987
	② 物件費等	5,331	5,647	5,897	6,004	6,251	6,717
	③ その他の業務費用	620	489	453	454	484	495
	④ 移転費用	11,286	11,624	11,939	10,884	11,611	14,369
	経常収益	1,496	1,471	1,479	1,551	1,593	1,544
	臨時損失	277	75	197	36	105	5
	臨時利益	27	300	78	2	3	4
	純行政コスト	18,518	18,619	19,602	18,243	19,340	23,024
	① 税収等	13,725	13,865	13,693	11,581	12,038	12,139
	② 国県等補助金	5,107	5,370	5,653	6,511	6,732	10,700
	財源	18,832	19,235	19,346	18,092	18,769	22,839
	本年度差額	314	616	−256	−151	−570	−185
連結	① 人件費	3,801	3,349	3,555	3,231	3,472	3,935
	② 物件費等	6,803	6,649	6,863	6,776	7,142	7,535
	③ その他の業務費用	719	525	493	493	531	544
	④ 移転費用	10,620	11,040	11,352	10,136	10,856	13,518
	経常収益	3,407	2,479	2,547	2,413	2,651	2,553
	臨時損失	351	94	208	46	120	36
	臨時利益	33	26	107	26	43	45
	純行政コスト	18,854	19,152	19,817	18,243	19,426	22,970
	① 税収等	13,831	14,085	13,917	11,609	12,190	12,182
	② 国県等補助金	5,138	5,399	5,668	6,602	6,798	10,703
	財源	18,969	19,484	19,585	18,211	18,987	22,885
	本年度差額	115	332	−232	−32	−439	−85
減価償却費	一般会計等	1,471	1,567	1,551	1,560	1,570	1,543
	全体会計	2,195	2,301	2,290	2,304	2,316	2,293
	連結会計	2,500	2,533	2,447	2,473	2,491	2,460

（注）民間企業では、「本年度差額」が「利益」に相当するのでプラスの必要があるが、公会計は利益目的ではない。

公会計の場合、減価償却費が計上されるので、ほとんどの自治体でマイナスになる。

➡プラスかマイナスかが重要でなく、その水準での経年推移の分析が、重要である。

(b) 自治体間比較

NWMより

（単位：百万円）

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
一般会計等	① 人件費	2,751	4,436	2,648	2,127	2,406	2,584
	② 物件費等	5,390	10,587	4,566	4,172	4,766	7,338
	③ その他の業務費用	205	468	151	164	219	238
	④ 移転費用	9,363	18,415	5,037	7,315	7,056	7,656
	経常収益	304	767	431	507	468	475
	臨時損失	0	1,024	6	23	327	438
	臨時利益	4	139	559	3	33	11
	純行政コスト	17,401	34,024	11,418	13,291	14,273	17,768
	① 税収等	9,647	22,624	9,614	8,986	10,559	13,210
	② 国県等補助金	7,078	7,971	2,508	3,318	3,934	3,820
	財源	16,725	30,595	12,122	12,304	14,493	17,030
	本年度差額	-676	-3,429	704	-987	220	-738
全体	① 人件費	2,987	9,781	2,860	2,303	2,588	6,300
	② 物件費等	6,717	16,749	6,267	4,774	6,301	5,732
	③ その他の業務費用	495	1,546	371	305	640	485
	④ 移転費用	14,369	30,462	11,021	12,241	12,866	15,134
	経常収益	1,544	10,538	1,671	1,154	1,805	2,438
	臨時損失	5	1,046	6	25	331	439
	臨時利益	4	139	559	3	33	11
	純行政コスト	23,024	48,907	18,295	18,491	20,888	25,641
	① 税収等	12,139	29,099	12,431	11,213	13,483	16,707
	② 国県等補助金	10,700	16,683	6,807	6,251	7,964	8,836
	財源	22,839	45,782	19,238	17,464	21,447	25,543
	本年度差額	-185	-3,125	943	-1,027	559	-98
連結	① 人件費	3,935	11,429	3,309	4,126	3,091	4,701
	② 物件費等	7,535	25,343	6,997	6,785	6,868	10,812
	③ その他の業務費用	544	1,936	594	486	747	750
	④ 移転費用	13,518	37,448	14,852	13,753	15,291	18,918
	経常収益	2,553	18,568	2,428	3,569	1,904	4,963
	臨時損失	36	1,055	6	43	337	441
	臨時利益	45	140	596	83	33	11
	純行政コスト	22,970	58,503	22,734	21,541	24,397	30,648
	① 税収等	12,182	33,656	14,476	12,706	15,252	19,015
	② 国県等補助金	10,703	21,930	9,116	7,954	9,892	11,344
	財源	22,885	55,586	23,592	20,660	25,144	30,359
	本年度差額	-85	-2,917	858	-881	747	-289
減価償却費	一般会計等	1,543	4,372	1,630	1,244	1,804	2,133
	全体会計	2,293	6,452	2,463	1,521	2,677	3,172
	連結会計	2,460	6,850	2,677	1,820	2,993	3,467
一般会計等	人件費÷純行政コスト	15.8%	13.0%	23.2%	16.0%	16.9%	14.5%
	物件費÷純行政コスト	31.0%	31.1%	40.0%	31.4%	33.4%	41.3%
	移転費用÷純行政コスト	53.8%	54.1%	44.1%	55.0%	49.4%	43.1%
	国県等補助金÷財源	42.3%	26.1%	20.7%	27.0%	27.1%	22.4%

（5）純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況

将来世代への投資は、魅力的な町造りのためには、必須のものであるが、将来世代に対する投資水準を表した純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況がどうだったのか？

➡将来世代のための投資水準の変動を表す「固定資産等の変動」は、-735百万円であり、有形固定資産の変動額は、-991百万円で、金融資産の変動額は、255百万円である。

しかし、少子高齢化を踏まえ、長期計画立案の上で投資を決定する必要がある。

（a） 経年比較

NWMより

（単位：百万円）

区分	項目	27	28	29	30	31	R02
一般会計等	固定資産等の変動（内部変動）	-204	-208	-1,024	-844	-955	-735
	有形固定資産等の増加	839	379	565	919	467	552
	有形固定資産等の減少	1,471	1,569	1,551	1,576	1,570	1,543
	貸付金・基金等の増加	717	1,255	718	943	1,159	1,213
	貸付金・基金等の減少	289	273	756	1,130	1,010	957
全体	固定資産等の変動（内部変動）	-479	-516	-1,154	-1,060	-1,121	-861
	有形固定資産等の増加	1,237	950	1,217	1,464	1,012	1,138
	有形固定資産等の減少	2,215	2,429	2,379	2,381	2,350	2,332
	貸付金・基金等の増加	803	1,308	836	1,013	1,278	1,322
	貸付金・基金等の減少	304	345	828	1,156	1,061	988
連結	固定資産等の変動（内部変動）	-712	-334	-1,020	-878	-796	-940
	有形固定資産等の増加	1,334	1,297	1,343	1,801	1,436	1,238
	有形固定資産等の減少	2,534	2,752	2,538	2,551	2,566	2,521
	貸付金・基金等の増加	810	1,328	877	1,039	1,269	1,338
	貸付金・基金等の減少	322	208	702	1,167	936	995

（b） 自治体間比較

NWMより

（単位：百万円）

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
一般会計等	固定資産等の変動（内部変動）	-735	-3,524	245	1,768	1,082	399
	有形固定資産等の増加	552	1,997	1,111	3,279	2,462	3,060
	有形固定資産等の減少	1,543	5,412	1,644	1,316	1,877	2,690
	貸付金・基金等の増加	1,213	2,439	1,042	638	1,698	1,598
	貸付金・基金等の減少	957	2,548	264	833	1,201	1,569
全体	固定資産等の変動（内部変動）	-861	-5,143	-110	1,668	1,106	-102
	有形固定資産等の増加	1,138	3,547	1,972	3,569	3,239	3,545
	有形固定資産等の減少	2,332	7,530	2,984	1,602	2,792	3,729
	貸付金・基金等の増加	1,322	3,714	1,214	653	1,927	1,751
	貸付金・基金等の減少	988	4,874	312	952	1,268	1,669
連結	固定資産等の変動（内部変動）	-940	-4,682	-240	1,902	846	51
	有形固定資産等の増加	1,238	4,580	2,313	4,110	3,290	3,944
	有形固定資産等の減少	2,521	7,935	3,459	1,905	3,107	4,026
	貸付金・基金等の増加	1,338	3,804	1,273	724	1,980	1,910
	貸付金・基金等の減少	995	5,131	367	1,027	1,317	1,777

（6）資金収支計算書から読みとれる二つの基礎的財政収支（プライマリーバランス）の状況

・基金への積み立てを、投資活動収支に含める（①）か、含めないか、二つの異なった健康診断がなされる。

業務活動収支と投資活動収支を合算した利払後基礎的財政収支が、ゼロ以上であれば、地方債に依存しない財政運営が行われたことになりますが、どうだったのか？

➡本年度の利払後基礎的財政収支は、163百万円であり、基金への積み立てを含めない場合は、418百万円です。

・なお、臨財債を借金と見ない場合の収支を一般会計についてのみ示した。

（a）経年比較

（単位：百万円）

区分	決算年度	27	28	29	30	31	R02
一般会計等	業務活動収支	1,078	1,383	1,070	778	667	661
	投資活動収支	−992	−1,263	−462	−642	−572	−499
	利払後基礎的財政収支（①）	86	120	608	136	94	163
	基金等増加（②）	428	982	−38	−187	149	255
	基金除外基礎的財政収支（①+②）	514	1,102	570	−50	243	418
	臨時財政対策債増加（③）	200	87	66	27	−83	−126
	臨財債除外後（①+②＋③）	714	1,189	636	−23	160	292
全体	業務活動収支	2,095	2,369	2,007	1,862	1,344	1,738
	投資活動収支	−1,383	−1,554	−756	−1,089	−1,062	−1,008
	利払後基礎的財政収支（①）	712	815	1,251	773	282	730
	基金等増加（②）	499	963	8	−143	216	334
	基金除外基礎的財政収支（①+②）	1,211	1,778	1,259	631	498	1,064
連結	業務活動収支	2,223	2,762	2,360	2,053	1,573	1,973
	投資活動収支	−1,454	−1,888	−880	−1,344	−1,336	−1,082
	利払後基礎的財政収支（①）	769	874	1,481	709	237	891
	基金等増加（②）	488	1,120	175	−128	334	342
	基金除外基礎的財政収支（①+②）	1,257	1,995	1,656	581	570	1,233

（単位：年）

区分	決算年度	27	28	29	30	31	R02
地方債等償還可能年数	一般会計等	192	133	26	114	163	93
	全体会計	39	33	21	33	88	33
	連結会計	40	33	19	38	113	29

(b) 他団体比較

（単位：百万円）

	区分	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
一般会計等	業務支出	16,044	29,592	10,735	12,448	12,616	15,674
	業務収入	16,706	30,862	11,983	12,281	14,198	16,716
	臨時支出	0	0	0	0	289	0
	臨時収入	0	0	552	0	176	0
	業務活動収支（現役世代収支）	661	1,270	1,800	-167	1,469	1,042
	投資活動支出	1,765	5,871	2,981	3,891	3,986	4,252
	投資活動収入	1,266	4,583	1,625	1,262	1,602	2,511
	投資活動収支（将来世代収支）	-499	-1,288	-1,356	-2,629	-2,384	-1,741
	利払後基礎的財政収支（①）	163	-18	444	-2,796	-915	-699
	基金等増加（②）	255	-109	778	-195	497	29
	基金除外基礎的財政収支（①+②）	418	-127	1,222	-2,991	-418	-670
全体	業務支出	22,130	52,850	18,122	17,895	19,566	24,451
	業務収入	23,869	55,235	19,902	18,041	22,200	26,846
	臨時支出	1	23	0	1	289	0
	臨時収入	0	0	552	11	176	0
	業務活動収支（現役世代収支）	1,738	2,362	2,332	156	2,521	2,395
	投資活動支出	2,397	7,593	4,029	4,181	4,899	4,855
	投資活動収入	1,389	6,395	1,981	1,375	1,813	2,844
	投資活動収支（将来世代収支）	-1,008	-1,198	-2,048	-2,806	-3,086	-2,011
	利払後基礎的財政収支（①）	730	1,164	284	-2,650	-565	384
	基金等増加（②）	334	-1,160	902	-299	659	82
	基金除外基礎的財政収支（①+②）	1,064	4	1,186	-2,949	94	466
連結	業務支出	22,922	70,117	23,068	23,073	23,173	31,601
	業務収入	24,878	72,842	25,042	23,491	25,954	34,225
	臨時支出	23	23	0	21	289	0
	臨時収入	41	0	553	12	176	0
	業務活動収支（現役世代収支）	1,973	2,702	2,527	409	2,668	2,624
	投資活動支出	2,506	20,483	4,159	4,849	5,019	5,263
	投資活動収入	1,424	20,413	2,061	1,725	1,863	3,074
	投資活動収支（将来世代収支）	-1,082	-70	-2,098	-3,124	-3,156	-2,189
	利払後基礎的財政収支（①）	891	2,632	429	-2,715	-488	435
	基金等増加（②）	342	-1,327	906	-303	663	133
	基金除外基礎的財政収支（①+②）	1,233	1,305	1,335	-3,018	175	568

・ 作成方法は、歳入歳出決算書の「款・節・細節」から繰越金・地方債発行・元金償還金を除外する。

・「基礎的財政収支」がゼロで成長率が利子率以上の場合、地方債残高は増えないとされている。
しかし、成長率が利子率以上という前提が成立しない場合には、利子償還金相当額、地方債残高は増加していくのである。

・ 財務省のHPでは、「財政収支」という言葉で表現されている。
「基礎的財政収支が均衡したとしても利払い費分だけ債務残高の実額は増加してしまうのである。これを止めるためには、利払い費を含む財政収支を均衡させる必要がある。この財政収支の均衡とは、新たに借金をする額と過去の借金を返す額が同額である状態を言う。」

★ 特徴

・ 当該年度で地方債を財源とする大きな普通建設事業があると、利払後基礎的財政収支は悪化するであろう。

・ 財政調整基金等の大きな貯金を行うと、投資活動支出に含まれるので、利払後基礎的財政収支は悪化するであろう。

(a) 地方債等償還可能年数を比較(財政の健全性の指標)

・利払後基礎的財政収支の数値がマイナスの場合は指標として意味を成しませんが、、プラスの場合、年度末の「地方債残高」から除して「地方債等償還可能年数」を算出できるので、自治体の現在の財政状態が示されます。

➡地方債等償還可能年数は、本年度、93年です。

・「地方債等償還可能年数」は、自治体の現在の財政状態を表す重要な指標である。

(単位:年)

指標	会計区分	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
地方債等償還可能年数(注)	一般会計等	93	−1,958	39	−6	−17	−27
	全体会計	33	46	94	−8	−42	75
	連結会計	29	22	67	−9	−49	69

(注)計算式＝地方債等残高 ÷ 利払後基礎的財政収支

★ 特徴

・ 地方債等償還可能年数は、本年度の収支が続くと仮定して、地方債等残高がゼロになる必要年数である。

・ 他団体の連結の平均的な年数ですあるが、当事務所のデータによれば、住民数20万人台の自治体では、概ね20年から40年という数値の財政状態のところが多くなっている。

・ 住民数50万人以上の自治体では、利払後基礎的財政収支、地方債等償還可能年数がマイナスで、地方債残高が増えていくという状況のところが多くなっている。

（7）歳入歳出決算書の経年データ

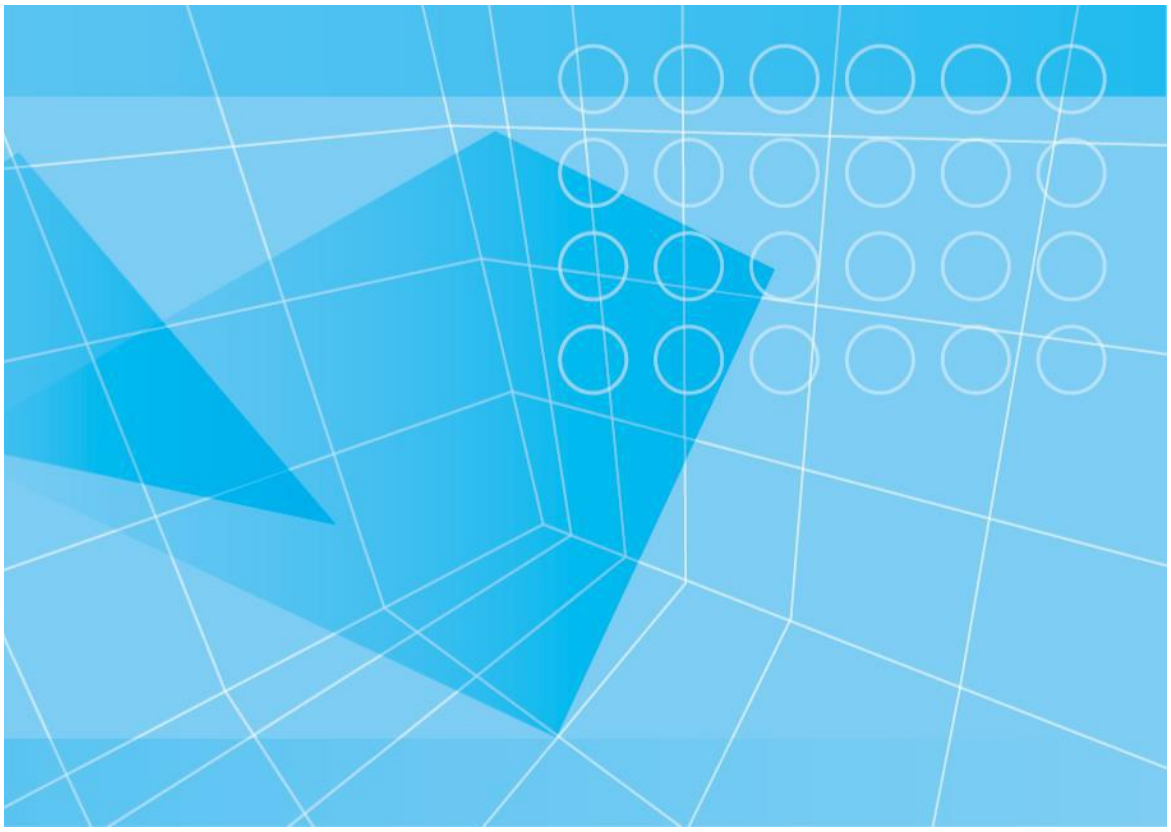
歳入歳出決算書より　　（単位：百万円）

款 or 節		27	28	29	30	31	R02
予算現額		15,375	15,772	15,437	15,546	16,303	21,517
収入済額	市町村税	3,534	3,537	3,600	3,595	3,730	3,618
	地方消費税交付金	594	534	564	608	571	700
	地方交付税	4,457	4,427	4,266	4,135	4,087	4,163
	国庫支出金	1,696	1,719	1,636	1,686	1,955	5,847
	都道府県支出金	971	1,274	1,639	1,032	1,032	1,231
	その他の款	1,400	1,535	2,111	2,293	2,627	2,409
	小計（①）	12,652	13,026	13,816	13,349	14,002	17,968
	繰越金	945	1,118	762	968	956	963
	地方債発行	1,434	789	853	1,166	1,098	955
	合計（②）	15,031	14,933	15,431	15,483	16,056	19,886
予算現額と収入済額との比較（予算差異）		344	839	6	63	247	1,631
支出済額	委託料	1,524	1,663	1,918	1,814	1,758	2,054
	工事請負費	1,172	530	625	1,149	988	894
	負担金及び補助交付金	2,088	2,387	2,697	1,884	2,404	5,584
	扶助費	1,895	1,979	2,507	2,214	2,294	2,337
	繰出金	1,627	1,602	1,644	1,622	1,670	1,632
	その他の節	4,093	4,594	3,682	4,393	4,615	5,200
	小計（③）	12,399	12,755	13,073	13,076	13,729	17,701
	地方債費	1,514	1,416	1,391	1,382	1,364	1,367
	合計（④）	13,913	14,171	14,464	14,458	15,093	19,068
不用額		344	839	6	63	247	1,631
実質収支に関する調書より記入	歳入歳出差引額（②－④）	1,118	762	967	1,025	963	818
	翌年度へ繰越すべき財源	46	50	32	104	22	20
	実質収支額	1,072	712	935	921	941	798
	基金繰入額	0	0	0	0	0	0
	翌年度繰越金	1,072	712	935	921	941	798

財源内訳

決算統計13表より記入	国庫支出金	1,684	1,699	1,625	1,688	1,943	5,849
	都道府県支出金	967	1,274	1,638	1,029	1,027	1,228
	使用料手数料	126	149	163	152	137	95
	分担金負担金寄附金	206	194	207	206	156	897
	財産収入	15	15	16	15	12	20
	繰入金	33	83	55	288	149	929
	諸収入	148	147	133	126	150	213
	繰越金	0	0	0	0	0	969
	地方債	940	374	427	747	757	955
	一般財源等	9,784	10,224	10,188	10,198	10,750	8,722
	歳出合計	13,903	14,159	14,452	14,449	15,081	19,877

令和２年度
南陽市の財務書類
【分析編】



南陽市財政課

令和２年度決算に係る「統一的な基準による財務書類」について、以下の各表から抽出したデータを活用し、分析を行いました。

◆貸借対照表

貸借対照表は、基準日時点において、地方公共団体が住民サービスを提供するために、どれほどの資産や債務を有するかについて情報を示すものです。資産と財源となる負債及び純資産の合計は必ず一致します。負債は、将来世代の負担を意味し、純資産は、現在までの世代の負担ととらえます。

資産規模がどの程度あり（資産合計）、それに対する将来世代の負担（負債合計）が何％あるのか、また、一般会計等、全体会計、連結会計のそれぞれの区分ごとにどの程度あるのかを読み取ることができます。

◆行政コスト計算書

行政コスト計算書は、行政コストという経費明細という位置付けにあり、発生主義数値を含んだ現役世代に対する資源の配分の状況を示しています。行政コストの面では、人にかかるコストである人件費、物にかかるコストである物件費等、移転的な支出である移転費用等といった区分が設けてあります。

◆純資産変動計算書

貸借対照表の「純資産の部」に計上されている各数値が１年間でどのように変動したかを表している計算書です。

一会計期間に、税収と補助金収入を財源として、現役世代に対してどの程度資源配分したのか、また、将来世代に対してどの程度資源配分したのか、つまり発生主義数値ではあるが住民から拠出された税収等が、どのように配分されたのかということを表しています。

◆資金収支計算書

資金収支計算書は、「業務活動収支」、「投資活動収支」、「財務活動収支」という表示区分を設けて収支状況を明示しています。

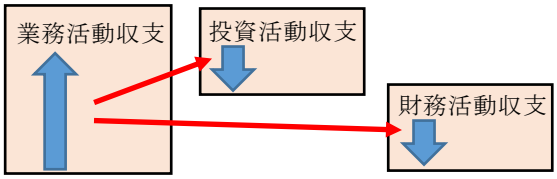
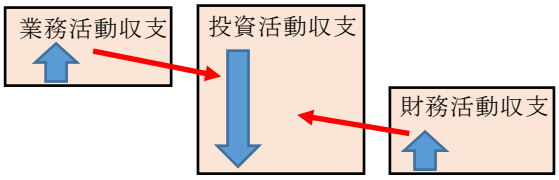
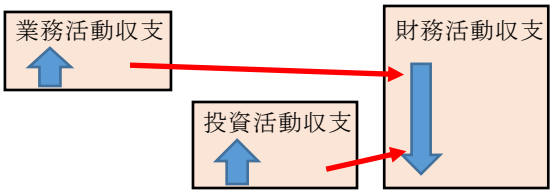
業務活動収支　：　地方公共団体の経営活動に伴い、継続的に発生する資金収支

投資活動収支　：　地方公共団体の将来世代に対する投資活動に伴い発生する資金収支

財務活動収支　：　地方公共団体の負債の管理に係る資金収支（負債の発行及び償還）

業務活動収支は税金と補助金収入を財源として、現役世代に対してどの程度資源配分したのかを表します。業務活動収支と投資活動収支を合算して、プラスの場合借金が減少したことを意味し、マイナスの場合借金が増加したことを意味します。

３つの収支について、主なタイプの例示（赤色矢印の方向が資金の流れを示します。）

タイプ例	図解	汲み取ることのできる内容
健全タイプ		◆経常的に発生する業務活動により獲得した資金を将来のために投資 ◆それでもなお余る資金は借金の返済（市債の償還）に充てる ◆公共資産への投資と借入金の返済を業務活動収支の範囲内により行っているため、健全といえる
積極投資タイプ		◆経常的に発生する業務活動により獲得した資金を将来のために投資 ◆かつ、借金（市債の発行）をしてその資金を投資に充てている ◆業務活動収支の範囲を超えて（将来負担のリスクをとって）積極的に公共投資を行っている
債務圧縮タイプ		◆経常的に発生する業務活動により獲得した資金を借金の返済（市債の償還）に充てている ◆かつ、公共資産や出資を売却する等して得た資金を借金の返済（市債の償還）に充てている ◆債務が減少しているため、将来リスクは減少しているが、必要な投資を行う余裕がない

連結対象とした会計の範囲

連　結

全　体

一般会計等[２会計]　一般会計、育英事業特別会計

特別会計[６会計]　水道事業会計、下水道事業会計、国民健康保険（事業勘定）特別会計、国民健康保険（直営診療勘定）特別会計、介護保険特別会計、後期高齢者医療特別会計

外郭団体[４会計]　置賜広域行政事務組合、置賜広域病院組合
株式会社ハイジアパーク南陽、土地開発公社

◎財務書類分析の視点

総務省から示された以下の分析の視点を参考に分析を行いました。

【分析の視点】	【住民のニーズ】	【指　標】
資産形成度	将来世代に残る資産はどのくらいあるのか	◆住民一人当たり資産額 ◆有形固定資産の行政目的別割合 ◆歳入額対資産比率 ◆有形固定資産減価償却率 （資産老朽化比率）
世代間公平性	将来世代と現世代との負担の分担は適切か	◆純資産比率 ◆社会資本等形成の世代間負担比率 （将来世代負担比率） 【関係指標】　将来負担比率
持続可能性（健全性）	財政に持続可能性があるか（どのくらい借金があるか）	◆住民一人当たり負債額 ◆基礎的財政収支 ◆債務償還可能年数 【関係指標】　健全化判断比率
効　率　性	行政サービスは効率的に提供されているか	◆住民一人当たり行政コスト ◆性質別・行政目的別行政コスト
弾　力　性	資産形成を行う余裕はどのくらいあるか	◆行政コスト対税収等比率 【関係指標】　経常収支比率 実質公債費比率
自　律　性	歳入はどのくらい税金等で賄われているか（受益者負担の水準はどうなっているか）	◆受益者負担の割合 【関係指標】　財政力指数

1 資産形成度　　将来世代に残る資産はどのくらいあるのか

資産形成度は、「将来世代に残る資産はどのくらいあるのか」といった住民の関心に基づくものです。

資産に関する情報は、歳入歳出決算書に添付される「財産に関する調書」においても、公有財産、物品、債権、及び基金の種別により記載されています。しかし、土地及び建物並びに山林は、地積や面積で測定され、動産も個数で表示されるなど、市が保有する資産の価値に関する情報を得ることができません。

貸借対照表（BS）は、資産の部において市の保有する資産のストック情報を一覧表示しており、これを「市民一人当たり資産額」や「有形固定資産の行政目的別割合」、「歳入額対資産比率」、「有形固定資産減価償却率」といった指標を用いてさらに分析することで新たな情報を得ることができます。

市民１人当たり資産額

資産総額 ／ 住民基本台帳人口

	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和２年
一般	150.0万円	149.0万円	148.1万円	146.6万円	145.6万円
全体	226.1万円	225.7万円	225.2万円	222.9万円	222.9万円
連結	236.5万円	235.7万円	235.6万円	234.5万円	234.9万円

資産総額を住民基本台帳人口で除することにより、市民１人当たりの資産額を算出します。類似団体との比較に利用します。

平成28年から令和２年にかけて、一般、全体、連結ともゆるやかな減少がみられます。これは、住民基本台帳人口が減少していますが、それを上回る割合で資産が減少していることを意味します。資産の減少要因としては、有形固定資産のうち事業用資産の減少▲2,510百万円（H28：25,423百万円 → R2：22,913百万円）が挙げられます。令和２年度は、道路関係のほか、小中学校の情報端末・高速通信ネットワーク整備、市民体育館空調設備、えくぼプラザ空調設備などが新たに資産として計上されました。

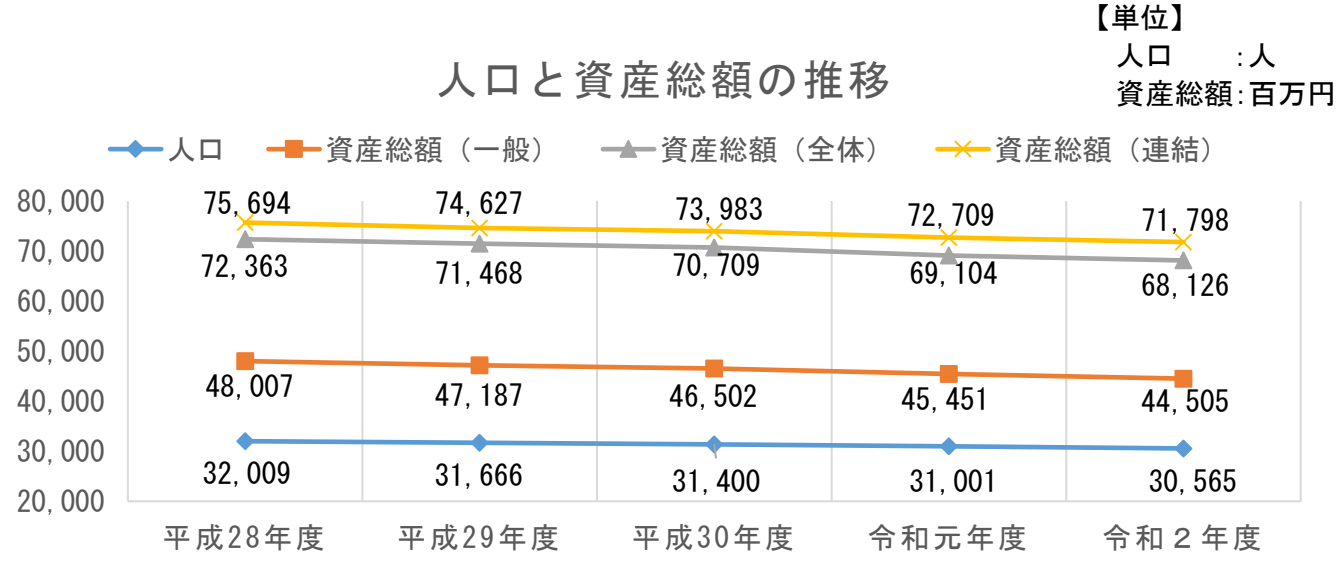
【資産総額】

	H28	R２	H28～R２増減額
一般	48,007百万円	44,505百万円	▲3,502百万円
全体	72,363百万円	68,126百万円	▲4,237百万円
連結	75,694百万円	71,798百万円	▲3,896百万円

【住民基本台帳人口】

平成28年　32,009人　　R２年　30,565人　　（▲1,444人）

※一般的な値　：　100万円～300万円程度



歳入額対資産比率

$$\frac{\text{資産総額}}{\text{収入総額}}$$

	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和２年
一般	3.5年	3.2年	3.2年	3.0年	2.4年
全体	3.3年	3.1年	3.2年	3.0年	2.6年
連結	3.1年	3.0年	3.1年	2.9年	2.6年

資金収支計算書の収入総額に対する資産総額の割合をいいます。これまでに形成された資産が収入の何年分に相当するかを表し、地方公共団体の資産形成の度合いを測ることができます。

平成28年から一般、全体、連結とも緩やかに減少しています。令和２年が大きく減少していますが、一時的な収入総額の増加によるものです。これは、一般会計等において新型コロナウイルス感染症対策事業を実施したことにより、業務収入のうち国県等補助金収入が大きく増加（令和元年比＋38.2億円）したことによります。一般会計等においては、平成28年と比較すると資産総額は35億円の減、収入総額は51億円の増となっており、歳入額対資産比率は1.1ポイント減少しています。

南陽市は、一般的な団体の平均より低い数値となっています。この歳入額対資産比率が高ければ、社会資本の整備に重点を置いてきたことを表しますが、歳入規模に対して過度の社会資本整備を行っている場合などは、今後それらの維持のための負担が大きくなり、将来の財政運営を圧迫するおそれがあります。必ずしも高ければよいものではないことに留意する必要があります。

※一般的な値　：　3.0年～7.0年程度

有形固定資産減価償却率

$$\frac{\text{償却資産の減価償却累計額}}{\text{償却資産の取得価額等}}$$

	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和２年
一般	48.8%	50.9%	52.1%	54.3%	56.2%
全体	42.6%	44.5%	45.8%	47.8%	49.7%
連結	44.1%	45.9%	47.3%	49.2%	50.4%

有形固定資産のうち償却資産の取得価額等に対する減価償却累計額の割合をいいます。

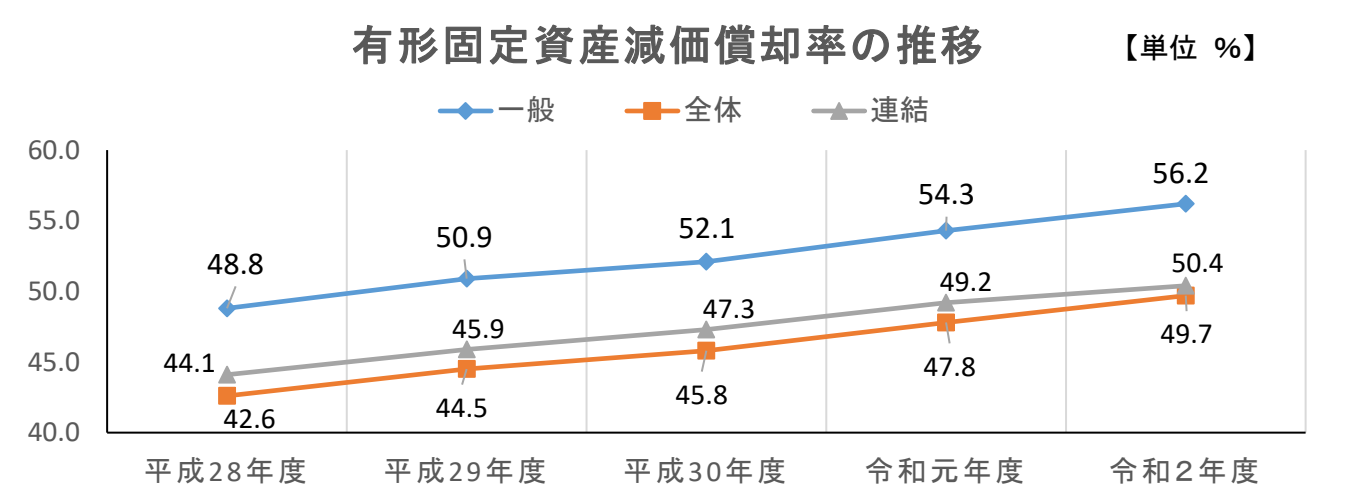
耐用年数に対して資産の取得からどの程度経過しているのかを表し、資産の老朽化のおおよその度合いを測ることができます。

一般的に数値が高いほど資産の老朽化が進んでいるといえます。本市においては公共施設を長く維持・活用し、トータルコストを抑えていくため、施設の長寿命化に取り組んでいます。そのため、この数値は今後も上昇していくことが予想されます。

平成28年から令和２年にかけて、一般7.4%、全体7.1%、連結6.3%それぞれ増加しています。これは、新たに取得した資産の額に比較して減価償却額が大きいことを示しています。

平成26年に文化会館を建築した影響（取得価格が大きく、かつ減価償却累計額が小さいのでこの数値を下げる要因となります。）で、本市の有形固定資産減価償却率は、極端に高い数値を示しているわけではありません。しかしながら、市の保有する４割以上の公共施設が築30年を経過するなど、全体としては施設の老朽化が進んでいる状況にあります。

※一般的な値　：　35%～50%程度



2 世代間公平性　　将来世代と現世代との負担の分担は適切か

世代間公平性は、「将来世代と現世代との負担の分担は適切か」といった住民の関心に基づくものです。これは、貸借対照表上の資産、負債及び純資産の対比によって明らかにされます。

世代間公平性を表す指標としては、地方財政健全化法における「将来負担比率」もありますが、貸借対照表により、財政運営の結果として、資産形成における将来世代と現世代までの負担のバランスが適切に保たれているのか、どのように推移しているのかを端的に把握することが可能となります。「純資産比率」や「社会資本等形成の世代間負担比率（将来世代負担比率）」が分析指標として挙げられます。

純資産比率

$$\frac{\text{純資産総額}}{\text{資産総額}}$$

	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和２年
一般	61.1%	61.5%	61.2%	60.8%	60.4%
全体	49.0%	49.3%	49.7%	50.1%	50.5%
連結	47.7%	48.2%	48.7%	48.9%	49.3%

資産総額のうち返済義務のない純資産がどれくらいの割合かを表します。
純資産の変動は、将来世代と現世代の間で負担の割合が変動したことを意味します。

企業会計でいう自己資本比率に相当し、この比率が高いほど財政状況が健全であるといえます。

平成28年から令和２年にかけて、一般は0.7%の減、全体は1.5%の増、連結は1.6%の増となっています。一般会計等において数値の減少がみられるのは、純資産総額の減少幅が比較的大きいためで、理由としては、経常費用のうち、物件費などの「業務費用」や社会保障給付などの「移転費用」がそれぞれ増加傾向となっていることが挙げられます。

なお、純資産は次の式において表すことができます。　純資産　＝　資産　－　負債

【資産総額】
前述のとおり

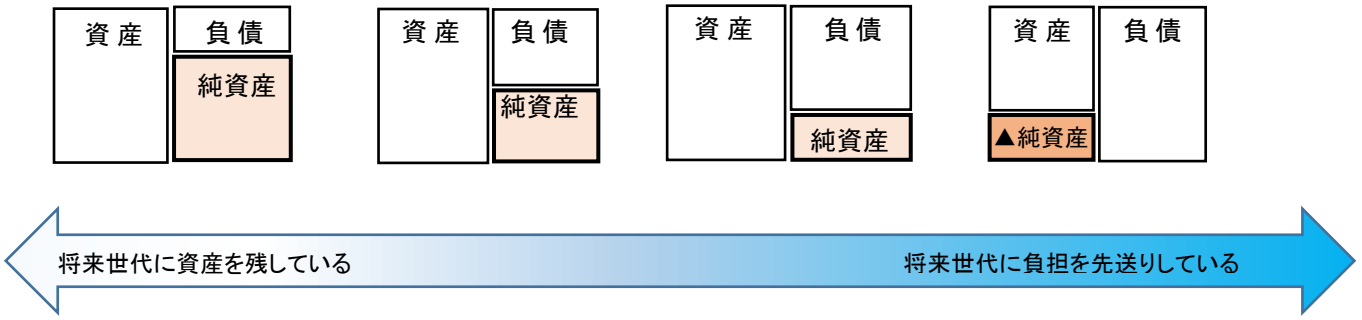
【純資産総額】

	H28	R２	H28～R２増減額
一般	29,353百万円	26,893百万円	▲2,460百万円
全体	35,483百万円	34,378百万円	▲1,105百万円
連結	36,118百万円	35,432百万円	▲686百万円

純資産額の増加は、現世代が自らの負担によって将来世代も利用することができる資源を蓄積したことを表しています。反対に純資産の減少は、将来世代が利用することができた資源を現世代が消費して便益を受ける反面、将来世代に負担が先送りされたことを表します。

全体、連結の値が低いのは、水道事業及び下水道事業の仕組みが、将来の使用料収入で回収することを前提としていることや、地方債の償還年限が一般会計等よりも長いことが要因です。

※一般的な値　：　50%～90%程度



将来世代負担比率		平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和２年
地方債＋１年内償還予定地方債 / 有形固定資産＋無形固定資産	一般	36.3%	36.2%	36.5%	37.0%	37.2%
	全体	40.5%	39.8%	39.5%	39.2%	38.8%
	連結	42.2%	41.0%	40.5%	40.5%	40.0%

社会資本等について地方債により形成した割合をいいます。数値が大きいほど社会資本等の形成に係る将来世代の負担の比重が大きくなります。

平成28年から令和２年にかけて、一般は0.9%増加しましたが、全体は1.7%、連結は2.2%それぞれ減少しています。これは、全体、連結会計において、将来世代の負担が着実に減少していることを表しています。数値が減少した主な要因は、地方債の減少です。

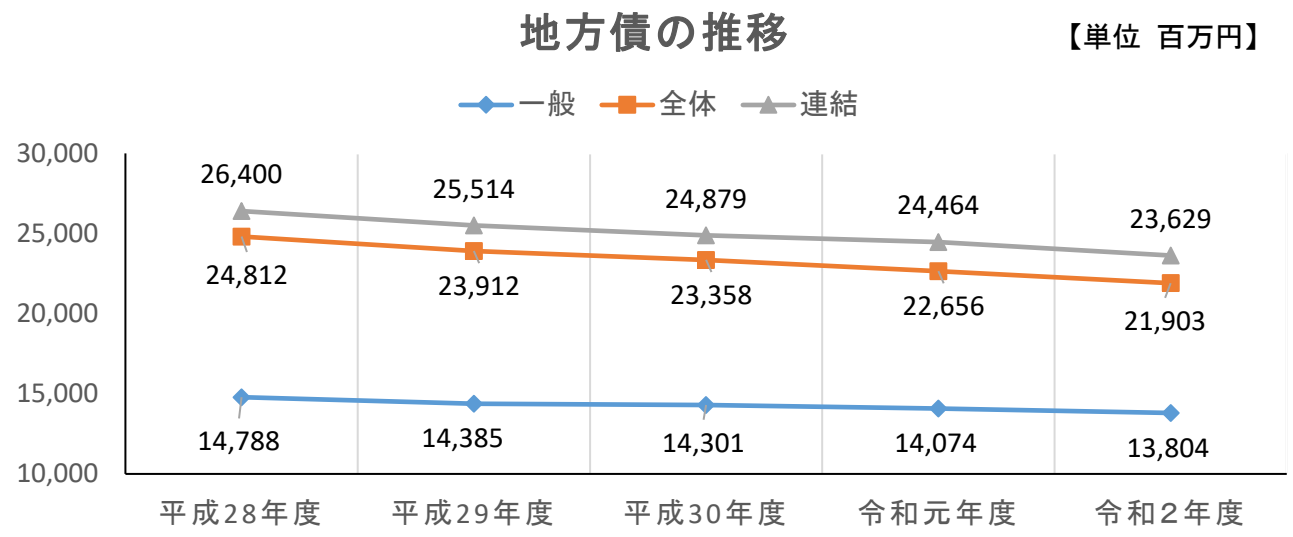
令和２年一般会計等においては、道路整備や災害復旧事業などのほか、新たにえくぼプラザ長寿命化施設整備工事、小中学校の情報端末・高速通信ネットワーク整備事業で地方債を発行しています。

地方債の発行には後年度の財政負担を伴いますが、「歳入・歳出の年度間調整」や「世代間公平のための調整」といった調整機能が備わるため、適切に発行されれば安定的な行政サービスの提供に大きく役立つものとされています。これからも本市の現状を正確に把握し、適正な発行額となるよう努めていきます。

【地方債の額】

	H28	R２	H28～R２増減額
一般	14,788百万円	13,804百万円	▲984百万円
全体	24,812百万円	21,903百万円	▲2,909百万円
連結	26,400百万円	23,629百万円	▲2,771百万円

※一般的な値　：　10%～40%程度



（注）上のグラフは「１年内償還予定地方債」を除いた地方債の推移を表しています。

3 持続可能性（健全性）　　財政に持続可能性があるか

持続可能性（健全性）は、「財政に持続可能性があるか（どのくらい借金があるか）」という住民の関心に基づくものであり、財政運営に関する本質的な視点といえます。これに対しては、第一に、地方財政健全化法の「健全化判断比率」（実質赤字比率、連結実質赤字比率、実質公債費比率及び将来負担比率）による分析が行われますが、これに加えて財務書類も有用な情報を提供することができます。

市の負債に関する情報については、現行の「予算に関する説明書」においても、債務負担行為額及び地方債現在高についてそれぞれ調書が添付されていますが、貸借対照表においては、このほかに退職手当引当金や未払金など、発生主義により全ての負債を捉えることが可能となります。

財政の持続可能性に関する指標としては、「市民一人当たり負債額」、「基礎的財政収支（プライマリーバランス）」、「債務償還可能年数」があります。

市民１人当たり負債額

負債総額 ／ 住民基本台帳人口

	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和２年
一般	58.3万円	57.4万円	57.5万円	57.5万円	57.6万円
全体	115.2万円	114.4万円	113.3万円	111.2万円	110.4万円
連結	123.6万円	122.1万円	120.8万円	120.0万円	119.0万円

人口１人当たりの負債総額をいいます。類似団体との比較に利用します。

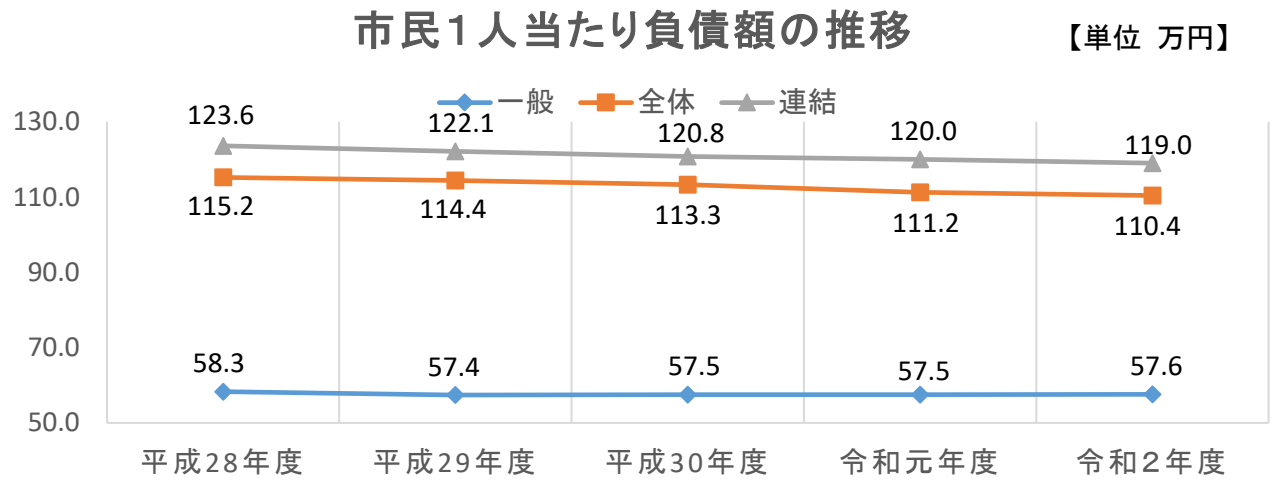
平成28年から令和２年にかけて、一般0.7万円、全体4.8万円、連結4.6万円それぞれ減少しています。これは、負債のうち、地方債（地方債と１年内償還予定地方債の合計額）の減少によるものです。令和２年一般会計等においては、市債発行額9.6億円に対し、元金償還額12.7億円となっており、前年度と比較すると 市債残高が3.1億円減少しています。（財務活動収支▲3.1億円）

【地方債の額】
前述のとおり

【１年内償還予定地方債の額】

	H28	R２	H28～R２増減額
一般	1,252百万円	1,287百万円	35百万円
全体	2,102百万円	2,090百万円	▲12百万円
連結	2,649百万円	2,308百万円	▲341百万円

※一般的な値　：　30万円～100万円程度



基礎的財政収支（プライマリーバランス）		平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和２年
業務活動収支－支払利息支出(▲)＋投資活動収支	一般	2.7億円	7.5億円	2.6億円	2.1億円	2.6億円
	全体	11.8億円	15.8億円	10.7億円	5.5億円	9.7億円
	連結	12.6億円	18.3億円	10.3億円	5.2億円	11.6億円

支払利息支出を除く業務活動収支及び投資活動収支の合計額をいいます。
地方債等の元利償還額を除いた歳出と地方債等発行収入を除いた歳入のバランスを表します。

各年度ともにプラスの数値を確保しており、公債費に依存しない財政運営が行われたことを示しています。

この数値が均衡（０に近い。）している場合には、経済成長率が長期金利を下回らない限り経済規模に対する地方債の比率は増加せず、持続可能な財政運営であるといえます。反対にこの数値が大きくマイナスになると、その年の経費が市債に依存しないと賄えなかったことを意味し、そのままの財政運営を継続していくことは困難になります。

債務償還可能年数		平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和２年
地方債＋１年内償還予定地方債 / 業務収入－ 業務支出	一般	11.1年	14.5年	19.9年	22.6年	22.8年
	全体	11.0年	12.0年	13.6年	17.5年	13.8年
	連結	10.2年	11.1年	13.3年	16.6年	13.3年

業務活動収支（臨時収支を除く。）に対する地方債残高の割合をいいます。
地方債の償還に要する年数を表し、年数が短いほど債務償還能力があるといえます。

平成28年から令和２年にかけて、一般、全体、連結ともそれぞれ増加しています。令和２年一般会計等においては、平成28年と比較し11.7ポイント数値が上昇していますが、これは分母である「業務活動収支」が7.9億円（14.5億円→6.6億円）減少したことによります。業務支出のうち、数値が増加した項目は以下の項目です。

物件費等支出　　：　1,074百万円（2,773百万円→3,847百万円）
補助金等支出　　：　2,992百万円（2,382百万円→5,374百万円）
社会保障給付支出　：　　358百万円（1,979百万円→2,337百万円）

令和２年は、新型コロナウイルス感染症対策事業により、各支出項目とも金額が大きく増加しています。

債務償還可能年数は、償還財源上限額を全て債務の償還に充当した場合に、何年で現在の債務を償還できるかを表す理論値です。債務の償還原資を経常的な業務活動からどれだけ確保できているかということは、債務償還能力を把握する上で重要な視点のひとつといえます。

※一般的な値　：　3年～9年程度

（注）「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」落合幸隆著（株）ぎょうせい　においては、債務償還可能年数の計算式を以下のとおり示していますが、他市では上記の計算式を採用しています。
本報告においては、他市との比較を容易にするため上記の計算式で分析を行いました。

【計算式】　（将来負担額 － 充当可能基金残高）÷（業務収入等 － 業務支出）

4 効率性　　行政サービスは効率的に提供されているか

効率性は、「行政サービスは効率的に提供されているか」という住民の関心に基づくものです。地方自治法においても、第２条第１４項において「地方公共団体は、その事務を処理するに当たっては、住民の福祉の増進に努めるとともに、最小の経費で最大の効果を挙げるようにしなければならない」とされています。財政の持続可能性と並んで住民の関心が高い視点といえます。

行政の効率性を表す「行政コスト計算書」は、市の行政活動に係る人件費や物件費等の費用を発生主義に基づきフルコストとして表示するものであり、行政の効率化を目指す際に不可欠な情報を一括して提供するものとなっています。

行政コスト計算書においては、「住民一人当たり行政コスト」を用いることにより、効率性の度合いを定量的に測定することが可能となります。

住民１人当たり行政ｺｽﾄ

純行政コスト
住民基本台帳人口

	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和２年
一般	38.3万円	41.1万円	39.6万円	43.4万円	56.9万円
全体	58.2万円	61.9万円	58.1万円	62.4万円	75.3万円
連結	59.8万円	62.6万円	58.1万円	62.7万円	75.2万円

住民１人当たりの行政コストをいいます。
類似団体との比較に利用することで、地方公共団体の行政活動の効率性を比較することができます。

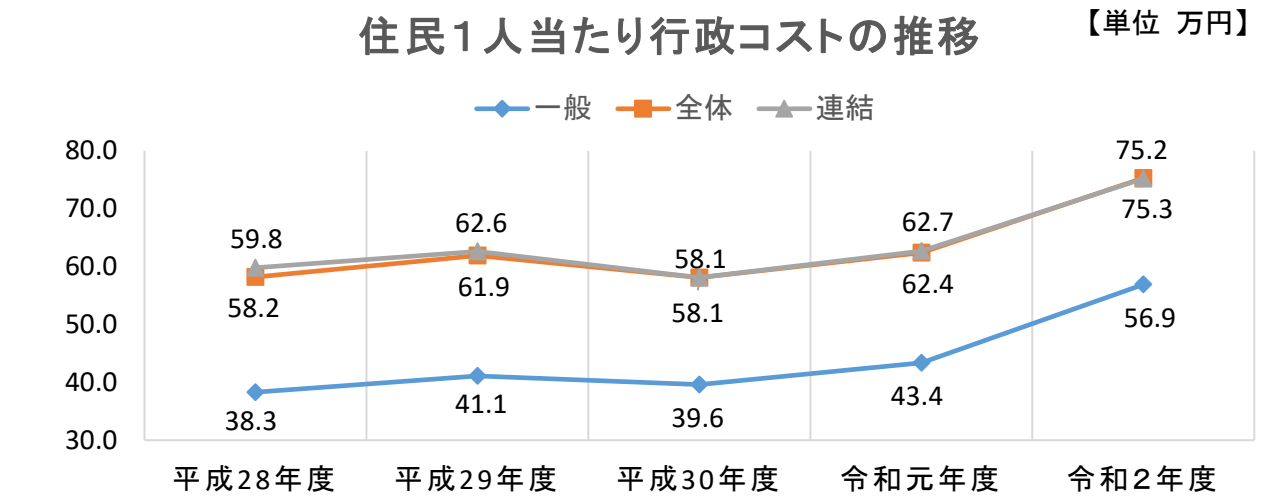
平成28年から令和２年にかけて、一般は18.6万円、全体は17.1万円、連結は15.4万円増加しています。これは、純行政コストの増加と住民基本台帳人口の減少によるものです。純行政コストが増加した主な理由は、経常費用のうち「移転費用」の項目に含まれる「補助金等」が大きく増加したことによります。

【純行政コストの額】

	H28	R２	H28～R２増減額
一般	12,259百万円	17,401百万円	5,142百万円
全体	18,619百万円	23,024百万円	4,405百万円
連結	19,152百万円	22,970百万円	3,818百万円

令和元年から令和２年にかけて、数値が大きく上昇していますが、これは一般会計等において、40億円規模の新型コロナウイルス感染症対策事業を実施したためです。市民一人当たり10万円を給付する「特別定額給付金給付事業」、小中学校のＩＣＴ環境を整備するための「情報端末・高速通信ネットワーク整備事業」、「緊急経済対策事業」などを実施しました。

※　住民１人当たり行政コストについては、地方公共団体の人口や面積、行政権能等により異なります。一概に他団体との比較を行うことは適切ではないため、比較する際には類似団体で行うこととされています。



5 弾力性　　資産形成を行う余裕はどのくらいあるか

弾力性は「資産形成等を行う余裕はどのくらいあるか」といった住民の関心に基づくものです。
財政の弾力性については、一般に、「経常収支比率」等が用いられますが、財務書類においても弾力性の分析が可能となっています。「純資産変動計算書」において、市の資産形成を伴わない行政活動に係る行政コストに対して地方税、地方交付税等の当該年度の一般財源等がどれだけ充当されているか「行政コスト対税収等比率」を示すことができます。
これは、市がインフラ資産の形成や施設の建設といった資産形成を行う財源的余裕度がどれだけあるかを示しています。

行政コスト対税収等比率

純経常行政コスト / 財源

	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和２年
一般	100.8%	103.2%	104.9%	106.7%	104.1%
全体	98.0%	100.7%	100.6%	102.5%	100.8%
連結	97.9%	100.7%	100.1%	101.9%	100.4%

資産形成を伴わない行政活動に係る行政コストに対して地方税、地方交付税等の当該年度の一般財源等がどれだけ充当されているかを示します。

平成28年から令和２年にかけて、一般3.3%、全体2.8%、連結2.5%それぞれ増加しています。令和２年一般会計等においては、令和元年と比較すると純経常行政コストは39.7億円の増、財源は41.4億円の増となっており、数値は2.6ポイント減少しています。この比率が100%に近づくほど資産形成の余裕度が低いといえ、さらに100%を上回ると、過去に蓄積した資産（基金など）が取り崩されたことを表します。
基金取崩収入（令和２年一般会計等）：前年比39百万円の減（952百万円→913百万円）

【純経常行政コストの額】

	H28	R２	H28～R２増減額
一般	12,491百万円	17,405百万円	4,914百万円
全体	18,844百万円	23,024百万円	4,180百万円
連結	19,084百万円	22,979百万円	3,895百万円

【財源の額】

	H28	R２	H28～R２増減額
一般	12,398百万円	16,725百万円	4,327百万円
全体	19,235百万円	22,839百万円	3,604百万円
連結	19,485百万円	22,885百万円	3,733百万円

※平均的な値：９０%～１１０%程度

6 自律性　　行政コストに対する受益者の負担はどのくらいあるか

自立性は「歳入はどのくらい税収等で賄われているか（受益者負担の水準はどうなっているか）」といった住民の関心に基づいています。

これは市の財政構造の自律性に関するものであり、決算統計における「歳入内訳」や「財政力指数」が関連しますが、財務書類についても、「行政コスト計算書」において使用料・手数料などの受益者負担の割合を算出することが可能であるため、これを受益者負担水準の適正さの判断指標として用いることができます。

受益者負担の割合

$$\frac{\text{経常収益}}{\text{経常費用}}$$

	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和２年
一般	2.6%	2.7%	3.0%	2.5%	1.7%
全体	7.2%	7.1%	7.9%	7.7%	6.3%
連結	11.5%	11.4%	11.7%	12.1%	10.0%

経常費用に対する使用料及び手数料を主とする経常収益の割合をいいます。
受益者が負担しない部分については、税、地方交付税及び補助金等により賄われます。

平成28年から令和２年にかけて、一般、全体、連結とも減少しています。令和２年で大きく数値が減少しているのは、一般会計等において前述の新型コロナウイルス感染症対策事業を実施したため経常費用が3,931百万円増（R元：13,779百万円 → R2：17,710百万円）となったことによります。

一般的に病院、ガス、上下水道事業を行う地方公共団体は、受益者負担比率の数値が高くなる傾向があります。

【経常収益の額】

	H28	H29	H30	R元	R２
一般	332百万円	357百万円	382百万円	342百万円	304百万円
全体	1,471百万円	1,479百万円	1,551百万円	1,593百万円	1,544百万円
連結	2,479百万円	2,547百万円	2,413百万円	2,651百万円	2,553百万円

【経常費用の額】

	H28	H29	H30	R元	R２
一般	12,824百万円	13,417百万円	12,795百万円	13,779百万円	17,710百万円
全体	20,315百万円	20,962百万円	19,759百万円	20,831百万円	24,568百万円
連結	21,563百万円	22,262百万円	20,636百万円	22,001百万円	25,532百万円

※平均的な値：２%～８%程度

（注）「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」落合幸隆著（株）ぎょうせい　においては、受益者負担の割合の計算式を以下のとおり示していますが、他市では上記の計算式を採用しています。
本報告においては、他市との比較を容易にするため上記の計算式で分析を行いました。

【計算式】　使用料及び手数料　÷　純経常行政コスト

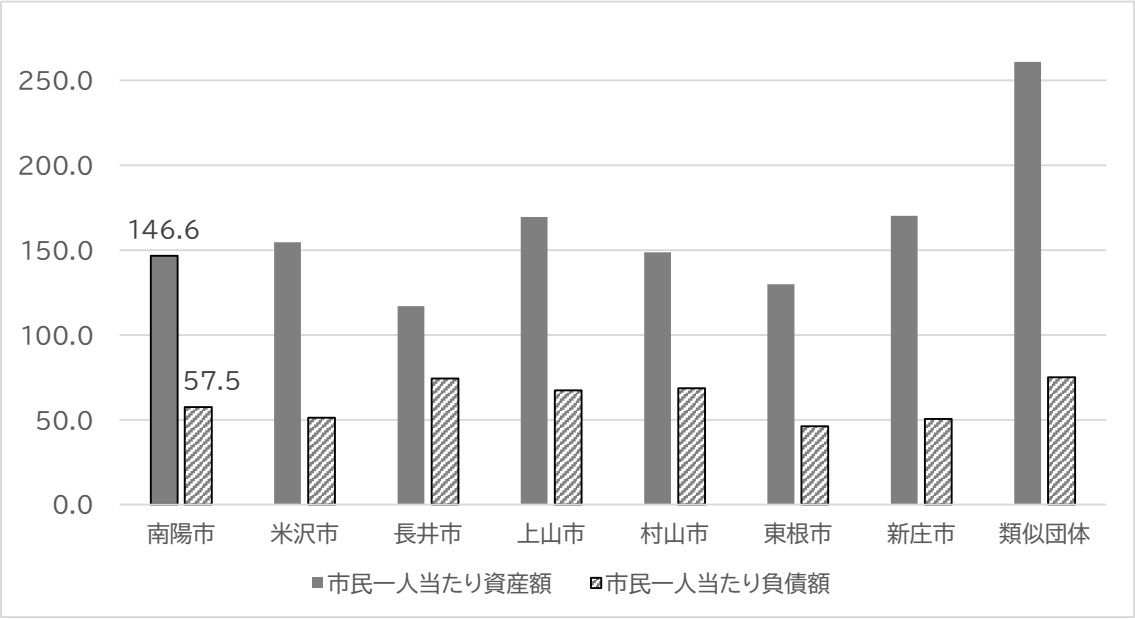
【参考資料】　「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」
落合幸隆著　（株）ぎょうせい

【参考資料】

主要指標の県内自治体との比較 （令和元年度決算：一般会計等）

南陽市の現状について県内の近隣及び同規模自治体と比較してみました。なお、他自治体の令和2年度数値がまだ公表されていませんので、**令和元年度の数値で比較しました。**

◆市民一人当たりの資産と負債



（単位：万円）

	南陽市	米沢市	長井市	上山市	村山市	東根市	新庄市	類似団体
市民一人当たり資産額	146.6	154.5	117.0	169.5	148.7	129.9	170.1	260.8
市民一人当たり負債額	57.5	51.1	74.3	67.3	68.6	46.2	50.5	75.0

人口	31,001	79,878	26,492	30,015	23,664	47,954	35,351

※南陽市は令和2年3月31日、他自治体は令和2年1月1日

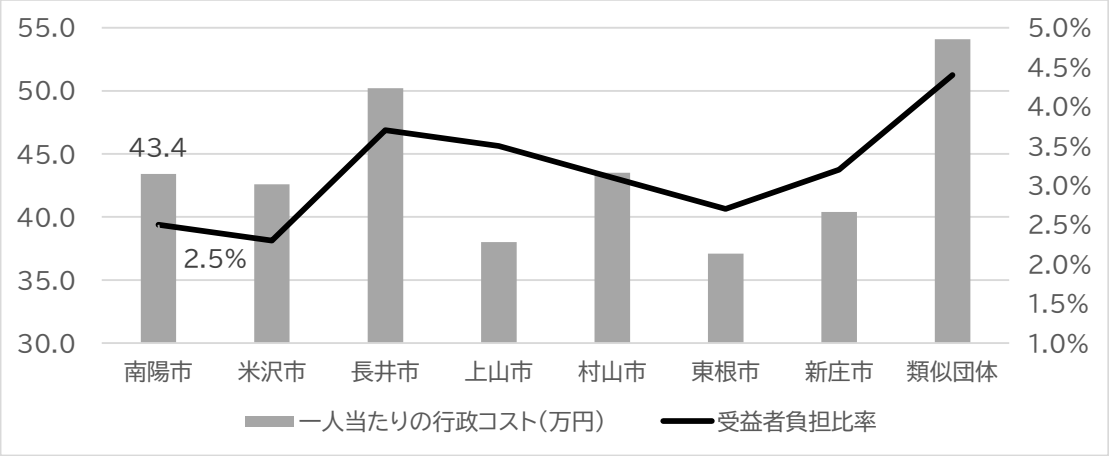
過去に取得した建物等の事業用資産の減価償却が進み、資産は減少傾向にあります。

負債については、地方債残高が減少していますが人口減少の影響もあり横ばいとなっています。

人口規模が小さい自治体ほど、人口増減の影響が数値に大きく反映されます。

＊類似団体
＝人口、産業構造の組み合わせで分類し、そのなかで標準的な運営をしている自治体の平均値をとったもの。

◆行政コストと受益者負担率

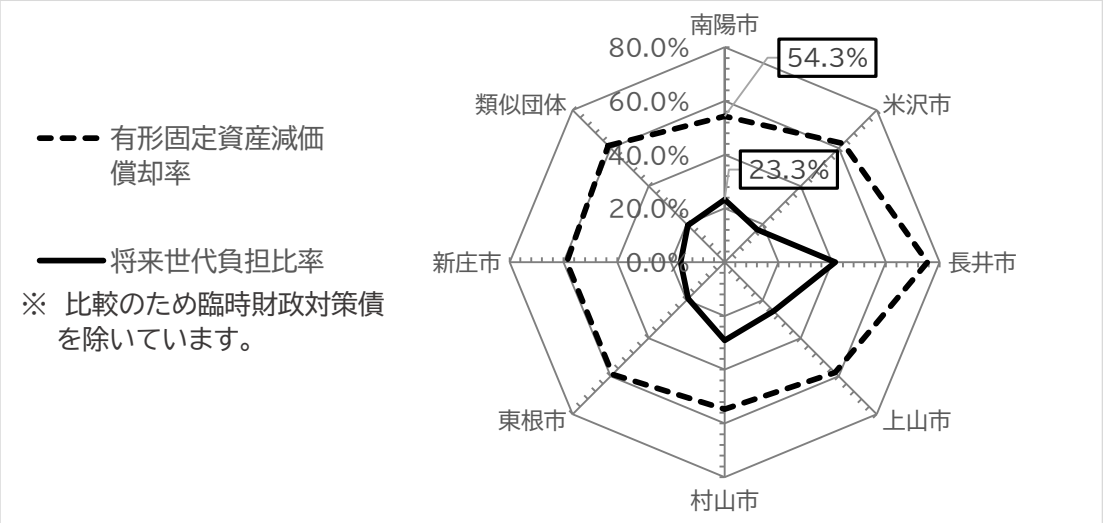


	南陽市	米沢市	長井市	上山市	村山市	東根市	新庄市	類似団体
一人当たりの行政コスト（万円）	43.4	42.6	50.2	38.0	43.5	37.1	40.4	54.1
受益者負担比率	2.5%	2.3%	3.7%	3.5%	3.1%	2.7%	3.2%	4.4%

南陽市の一人当たりの行政コスト、受益者負担率は、他と比較してもコストは高めで、負担は低い傾向にあります。

なお、令和2年度は新型コロナウイルス感染症にかかる各種給付事業などがあり行政コストは大きく増加し、受益者負担比率はコロナ交付金など国庫財源により減少しています。

◆施設の老朽化率と将来世代への負担



	南陽市	米沢市	長井市	上山市	村山市	東根市	新庄市	類似団体
有形固定資産減価償却率	54.3%	62.5%	75.5%	58.1%	54.7%	59.0%	58.8%	61.3%
将来世代負担比率	23.3%	17.1%	41.2%	25.8%	29.1%	19.2%	16.4%	19.3%

有形固定資産減価償却率（老朽化率）は平成26年に文化会館を整備したため他と比較しても高くはありません。（本市規模の場合、大規模な建設事業があれば数値に大きく影響します。）

将来負担比率についても補助事業や交付税措置のある有利な地方債の活用により将来世代の大きな負担とはなっていません。